

寛放録

十一

昭和五年十一月上浣起筆

特別  
14  
1919  
428





寛政拾一年

昭和五年十月下旬起筆

の修禪寺の入浴中、みくも感ある波を命承  
 五印が此年暮り此の味の真髓を揮ひといふ書  
 情ひ来つて、あららこらら捨ひ後して、公の  
 事自合が教へることとボウくある、今閑に乘り  
 要點と書き候く、

一 而、おつ後、必とす右側を下し、頭を右腹を  
 前として置かれ、鰯のやうな魚の形に  
 いが大きいのが丸く、此の位地が舟板も盤甚  
 の上にも置かれ、か例とすうとある、そこが魚

三好寺内閣





の右側を板つきと言ひまゝにしてある。魚の表  
 裏は云々が裏が板つきを表ハ左側の事である  
 右りやうと魚の板つきは、いつか魚の下をうら  
 りるうらと魚自身の重さを壓迫せよと云  
 氣の疏るもろく、水に浮り勝れぬ左側  
 及び味の方をせうとする。従つて鱈の如  
 きまゝと云ふと、板つき即ち右側と左側とを  
 ハ傍も亦左の片身を食ふ時は右側  
 の片身があるべきに、大抵の家庭は  
 左側を食ふに附着し、保つて板つきは  
 かんかくする。

一 魚のあらはの骨を肉と一やふるの旨



ハまゝの味がよまゝい。少し熱湯のあら  
 はの特、肉も多くする。是を大岩作りと  
 云ふのである。全体骨をこの肉をどうまゝいよ  
 かも、魚をびりして、鱈をいとも骨とおら  
 して中、骨は大きき骨、背骨が残る、まぎ  
 骨に附着して、肉を鉄が、おろし、取つ  
 て、おろし、後がある。まぎ肉に、醬油をつ  
 けて、おろし、味い、も、客か、忘んか、れい、と、して、ある  
 こと。

一 魚類を煮るとして、流して、運搬すると、味が、ある  
 こと。野に、め、お、よ、いと、云、つ、て、ある、こと、ある、こと  
 こと。シメは、お、お、ま、の、び、ある、こと、ある、こと、ある、こと



と云ふは、土佐の鯉が甘いと言ふの、釣上げれば  
鯉の釣を扱くと、尾を握ると逆ひ甲板に反  
す、さうすると鯉、鼻を突いて一息に死ん  
び、さう土佐の漁師、目か回ると忙し時  
にも吃方斯ふ事、ことを忘の時分が習得つた  
てゝある。鯉、鼻を握ると釣り上げると  
一逆して鼻をつかせる、必竟一息いゝ殺  
すから味がよいのである。

一 河豚の毒、今研究されてテトロトキシンと名が  
ついでる、肝と真子といふ事も多く、魚油も  
あるから、身をおろす時、肝と真子に傷を  
つけぬやう注意を要する。肉の中に入れてよ

呼ぶ、毒を死かともいふ、味は肉は喰ひ入つて  
あつても毒はないと云ふのである。

一 筍のハコリを料理をむく、横井と云ふてある。  
まん井の根、ササの生いて中まぶの無毒と云ふ  
もの、と無毒を採るから、エニ外丸のま  
い味はよい。概しも東京近郊の筍の出産が軟  
かひある為め、筍も豆腐のやうな軟かす  
ぎひ、産こたひがさう、西京の比較すると同  
日に採るまじい。西京の出産は望い上は純  
粋を多く採るから、よしのが出来、筍を  
親井、さうと云ふは、地をすしてなすもの  
ハ大抵五尺の間隔、毎年ある筍を存



し豆くのか定法と云うてある

一 鯉の中にち鯉と云ふのがある。身が柔か  
べとくしと云ふ。刺身うしと云ふ。口の中は溶け  
るやうだ。此の鯉と云ふのは秋口より限る。この初鯉  
と云ふのは(遠州)と云ふ。人のこいひ魚と云ふ。ぬし  
言つてある。ぬし(ぬき)焼ひがある。初鯉の昔し  
江戸は鯉の比が實に盛ううすくさう。

土佐も鯉の夕、きと云ふのがある。海岸にある  
つて未だ鯉を其体おどおろして海にお洗ひ  
大串にせしめて葉菜の肉圍に突き立て  
て焼く。焼き上つてから、庖丁の比で一寸叩  
く。この比がある。と云ふ。潮の味がシシシん

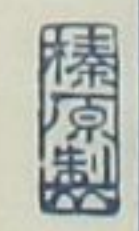
いぬしに葉菜の香りがあつた。この一種の風味が  
あつた。料理を作るに、この比味が無い。遠州  
の沖鯉と云ふのがある。漁船が鯉を三枚に  
おろして、尻尾を船にくくりつけ、海の中を  
引さつて、未だぬしと云ふ。塩味が浸みこん  
で、外部が白くする。この比、之れと云ふ。紋  
り深のやうなものである。この比、シボリとも呼ん  
で、田舎、今の漁船で沖鯉と云ふ。やうな  
西側、いぬしと云ふ。

一 外四産の魚類の旨味が日本のうまうま、  
あつた。その日本に飼養すると味がよ  
う。例へば支那産の鰻を輸入して、ゆに



巻魚池の飼養にして巻成物と名つけしもの  
一年巻成二年巻成三年巻成と名が  
ついであるが三年巻成と云ふと日本のもの  
優ると云ふこと也。鱧も朝鮮産を舞  
子の沖に二三ヶ月生かすに圍つておくと品物  
が全然大変化して内地産よりよくなるを  
云ふ。

一 下の圓の大を揚から東京へ河豚を送るもの二  
重の平鑑を使用する、中の鑑は大きき七寸平  
方より大きき尺位、鑑の底は骨其他大根  
木、葉味のものを木綿ひきひき入ん、其上は刺  
身を、之も木綿ひきひき入ん、一番上は白皮、里皮



白じり、鱧等、湯かいしものを入ん、鑑の蓋は  
はハンタ形、外鑑は二尺平方、高  
さ二尺五寸位、其中に氷を詰め、中鑑を仕  
込、此鑑は五人前鑑と言つて是れは値あり  
運賃は、又五尺四寸位、一人前也。

一 梶木マゴロと云ふは鮎の一種であるが江戸時代  
より斯う名は無いといふ。梶木といふ船の梶  
を突き破り得る程に鋭い嘴を打つてある  
かゝる名は、信にかけることあるから、鱧  
魚の漁法に據り、ツキンボで漁獲する、ツ  
キンボは鱧を投げつけを捕るの物である。梶木  
マゴロは味は下るが、最も持続性がある者



りの油法がゆゑに、

一 昔一の鰯を漁ることが俄に困難であつた間、  
傷に多い群が来れば捕らうか、今のやうに遠くの沖  
へ出さず投すことゝせよ、出来さうなら、今の速  
力の速かき石油船が動機船の大槳機五六艘を  
三、四艘の鰯を七、八艘の運搬を積んでゆく  
からさうして大槳機は、天候を測るに測候所  
か、或は行旅して魚群の位置も出来る、船の  
餌は鳥賊がたよりのが、鰯が昔一の獲らん  
るの時七あるに、今の冷凍の鳥賊を使つて  
二、三から此の漁業は、あつてへき漁か、  
る昔一の鰯漁は、漁るゝ多く生息を幼さ

るゝの、後家俵と呼ん、此の漁師の、良  
人を裁き、あつたと云ふ、此の、

一 東京の、俗に料理人を、品川町と言つて、  
い、板前以下、  
ある、鰯が日本橋、  
此の親合と言ふの、  
漁業の、  
上金、  
此の、  
か、  
の、  
一 近年、  
此の



の原因の一つは関西料理に練りこむ油の分量が少くない。経商のあつたから、上方の料理人の始末から、材料を無駄にせず、御きり方々、美味いもの、皆、経商の叶つてゐる。全体東京の料理の分量が多過ぎる。上方の分量を減らす方がよい。

一 日本料理のつき出しは、西洋料理の「オイル」が、少しある。酒のお手紙がある。

一 江戸兎か生地料理と好む。江戸、湘府の後、所方のもの多く、小田原、鎌倉をから入所。地味、芋の地、皆、海流、地形、上古地、よを、味の好し、比、即ち、海、流、地、の、江戸、の、風、を、う、た。



狩野、越後、三浦、武士、其の出身地、山手地、が、あ、ま、ま、崎、か、り、漢、松、く、出、て、来、た、の、び、ん、七、海、流、生、活、と、換、ん、て、み、ぬ、か、ら、所、方、と、味、を、同、じ、に。

一 日本の牛は、短角牛種で、飼育の方法が、行届いて居る。世界は、稀な、ま、ま、優、良、の、ま、ま、地、海、流、の、或、る、地、方、の、者、夫、い、夏、ま、ま、ま、ま、と、牛、舎、に、蚊、帳、を、吊、つ、て、や、る、程、の、可、愛、か、り、方、を、して、居、る、ま、ま、肉、の、味、も、悪、く、か、く、う、ま、か、ま、い、日本、の、牛、肉、日、品、上、品、の、世、界、に、於、て、あ、る、ま、ま、位、つ、ま、を、占、め、る、か、と、云、ふ、の、は、英、國、の、と、一、等、を、争、ふ、ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、比、較、ん、と、於、て、ハ、ロ、ー、ス、ト、



ビーフを以つて誇り、その牛鍋を以つて誇  
 る。牛鍋のスキヤキは母界より珍物地  
 である。東京で揚るる牛鍋は毎百頭一月  
 三千頭雪力の大さるるを云ふべし  
 一 鍋に牛肉を突つて人の自分か火が滅一盞か滅  
 七煮火加減も、まじく油節を放つるべし  
 忙しくもあつた油も出まぬ。寒中かお款  
 汗を出して煮火止の肉を吹き冷まするべし  
 ら合ふのいぬき目より少しく可笑しく又  
 ぬこともあつた一枚の鍋の中は、斯うして  
 精神が統一せんを長るところに牛鍋合  
 の真剣味がある。牛鍋料理も又張る生

徳島製

地の真味を失つていささか、いささかの合具を  
 入んぞするの合具無月の也  
 一 殿の串、あつたから来る品は、維新後  
 戸の士族が禄を失つたを、店裏の物故を  
 切つて串を削り出した。あつた串の始めは、  
 あつた串が長く、あつた串も、まんと又昔  
 剣術や籠術で鍛えられた侍が精神  
 をこめて削り上げ、串はかきとこつてあ  
 戸人の誇り、殿の間のあつた串と  
 しくもつてあつた  
 一 上方の殿の串、いささかと串つて殿と殿と  
 の間の白焼が入つたあつた串の志南

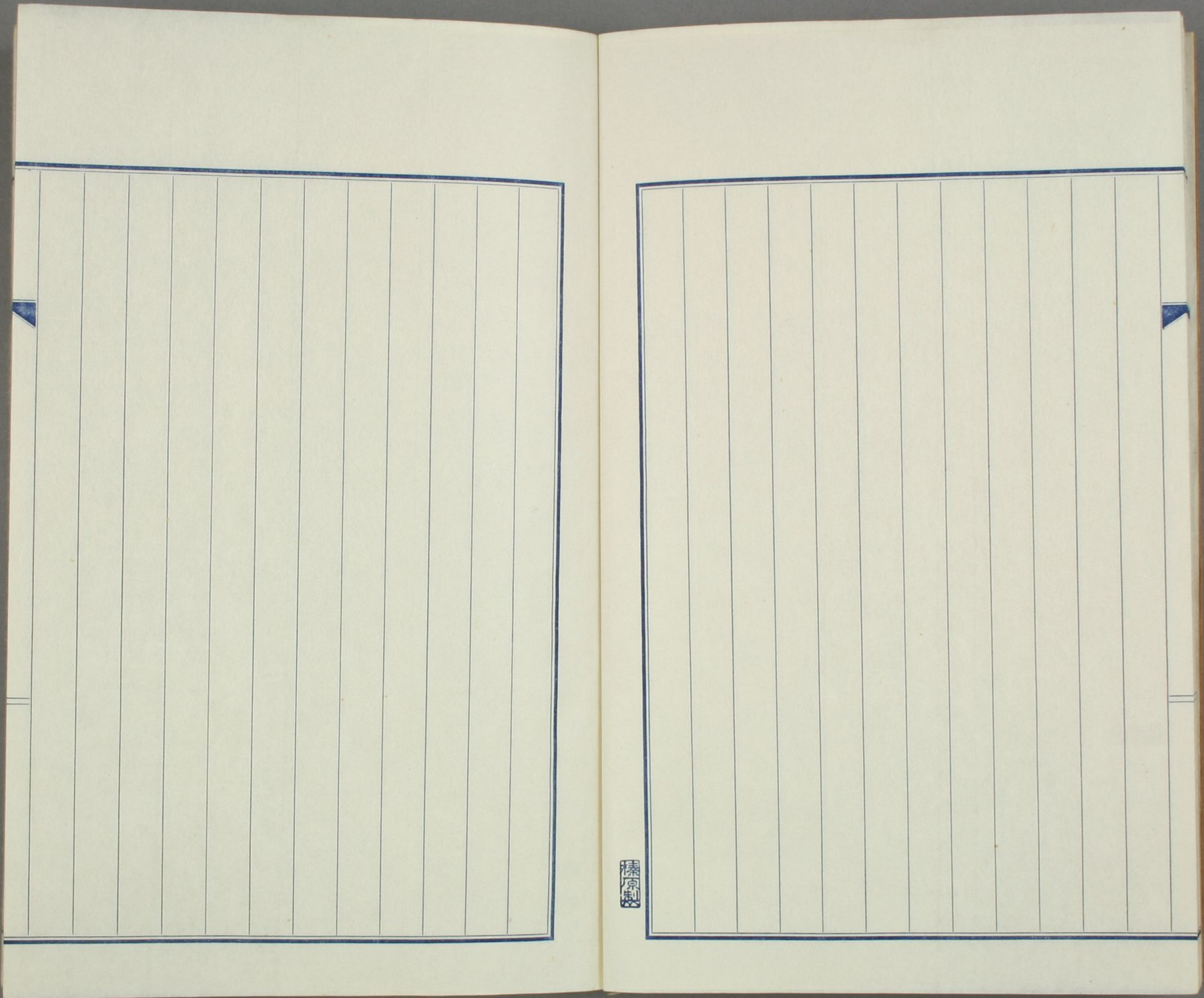


に穀と置かぬ、まあ「」と云ふ名も、是れ飯が  
穀と置かすから出たの比。

一 木香の一種の香料は、香料の香味にさくさくしては  
らぬ、さくさくして朽れ、我國民性と言ふ、我國民性  
深いから、此香りを合味に稱し、油配するに  
か出来てある。是れハ料理方が、杉葉と云ふ名  
稱が、呼んであるもの比、昔、徳大の杉の葉、枝  
の上は、魚の切身を乗せ、是れこそ、蒲くと杉の  
香りが、魚に朽つて、一種の香味を出さるもの比、  
その他に、枚、梅、豆腐と云ふのが、ある、杉葉の上  
に、味噌をぬりつけ、其上に豆腐を乗せ、是  
れ味噌と、塗るつけ、他の一枚の枚を以つて

之を、煮ひ、而して、さくさく、一枚の枚  
を、煮放して、他の枚の、さくさく、つけ、出す、此  
外は、鳥肉を、枚に、挟んで、焼く、ハ、ぎ、焼く、も、ある  
西洋の、木香の、木香を、福、料理法が、ある、つて  
一枚の上は、牛肉を、載せ、ステーキにする、  
是れを、ステーキ、ステーキ、と、云ふ、云ふ、  
比、と、ある。





藤原製



〇一茶の逸る子を二の三の書きつゝ

杉崎院の時は芭蕉の句碑、杉崎やまゝ杉崎  
や杉崎やまゝの句の傍に「杉崎やまゝの句に御書を  
也」と書き添へて人を笑わせた。

一茶公を安んずつて衣靴の洗濯をおくし善提寺  
の通寺のためには頼りしにあまゝ夜多の寺に頼る  
んと碑の比揚句被布の位をよむと終つせらる。

つきあはれを破れをよむとよむらひけり

せしと下をよむついでとよむ

と歌つたか、こゝに馬山の破林の酒の狂歌

我禁酒破れをよむとよむらひけり



そんついでくんとせんせいでくれ  
をもつたに、高き印の如くある

加賀の前田侯春勤交代の途次柏原と宿をんな時一  
茶を記さんれことかある一茶の君主と宿人と連ら  
れて仇討の道に問はん印州とて茶へ比とあるか  
彼人の姓が百葉名宛の書に、左の二句を  
其の姓があらわしてある

若や柳舟へ出ても日し影  
我柳志れまゝ新しうさうさう

去吧の先を歩くと時まじ花を指はるの若木をさるも  
情をよめるのまゝうさうし俺が引きて書す」とと筆  
托りて



私七揮りうさう梅うさ

名在左の有名な仇人土朗が一茶を訪問し時一茶の兄  
すねこいけ子とて道中の父子のあつたとて一  
茶の

仇討の殿様こゝろ御入り也

と皮肉を弄りてある

一茶の五元集を言はれとあるが、五元集は女角白巻  
のよひある、彼人の忠が女角の似比所のよひの  
或は女角のよひを言ふ人比のよひあるまゝか或は  
説き日蓮のよひを言ふ人比のよひか似寄りの  
よひかやうだ

浪華の大に丸の年、一茶もよき浪華ひあるかお



南に交わりがあらうも句七候とおる、自分か此頃手あふん  
大江丸八十二才の時の句幅に

をいふや一夜離れて恋をいふ

とあるが一茶の句も

放れ鴛鴦一すねすねも眺うけり

といふがある。大江丸八十二の句の句に

あは親に又せせし今年八十二

と云ふがある序のあはうおと

寛政夏目成美と親交があるは、おれ一茶は  
常に成美を頼りてお飲をいれと云ふ、ある時一茶  
が成美の門を叩いたと云ふ、あはう身うか穢い  
の云次かあはうと一茶の家を頼りて一句書いし



よとまをいふと示せと云ふのまをいふ、其句が例也

行信むい月と佛とおらが昔の友

この初句が始めとあつて、成美の句をいふ、其を呼  
ひよとて例を讀して握手すまふあつた。

成美の宅にまか給ふ、此時一茶が禁裏をいふこと  
が、おれ又いへてある、んち分るるあつた。保し成美  
ハ帯一茶を教へるあつた。

一茶継母の為め去く苦勞をいふ、此が継母が歿し、遺

産問題も片がついてから、克風雪月の如く継母

の出の手も離るる交りるやうにうた、その互

ひの性来の於初か日語を書きあはしてあるのを教へる



折角植くれ福壽考の出来がどうも、花は黄を帯びず、  
心油し、向うもを色し、一茶い  
多うと植くれ、勢も本性を失ふ、このめと、黄之  
若と名の付け

茶葉や黄之若も花の春

一茶に晩年、軽の中庭に罹つた、三番目の妻の妊娠  
中、没し、比のひらき、一茶の黄を、安んじて黄之若を口  
癖、  
癒、  
の門人、  
いや、  
と三番途、  
公古者、



咲えが、俺、  
名月や江戸の奴、  
と三番目の如き、  
と三番途を、

名月や江戸の奴、  
と三番目の如き、  
と三番途を、

と三番目の如き、  
と三番途を、



# デデケーション(進献本に就て)

市島 護 吉

本會 顧問

圖書を進献することは、日本でも支那でも古くから行はれてゐる。西洋の圖書の標題には往々誰れにデデケートするといふことが書かれてゐる。又特に一頁の餘白を割き、國王にデデケートするとか某貴族にデデケートすると大書してゐるものもある。必らずしも自家の著述に限る譯でもないから、私は廣義に圖書の二字を用ゐんとする。日本と支那とはデデケーションの標榜の形式が西洋と較々異つてゐる。それは追々記述するが、近年日本の圖書で西洋の例に倣ひ、タイトル・ページに獻呈を標榜するものが續々現はれて來た。

私は今獻書の沿革を述べる用意と暇を有たないが、恐らく佛に經を獻することが最も古くから行はれ、獻書の淵源はそこにあるかに思ふ。納經には寫經もあり刻經もある。其の獻納の意味は多くの場合卷末に錄されてゐる。それは何人も周知の事である。圖書の出版完成を神に祈願した例は、盲偉人橋保己一が羣書類従の出版を心掛けた時にある。初め橋がその目録を印刷して世に頒つた時、其の表紙裏に左の如く記してゐる。

此書の趣意は、本朝の古書多くありといへども、世々の兵亂、度々

の大火に就きて、過半亡失す。今其幸に残れるもの一二二百七十三種、集めて六百七十冊となし、梓に上せて以て不朽に傳へんことを思ひ、いにし安永八亥年より天滿宮に祈齋して、毎朝鹽味を絶ち、般若心經百廿卷を誦讀し、開板の速にならんことをねがふのみ。とある。これは獻書の例では無いけれども、鹽斷までして心經を讀み、祈願を籠めた位であるから、刻本の成つた時、先づ菅廟に獻じた事は勿論であると思ふ。

獻書の最も手近い例は頼山陽が日本外史を樂翁公に獻じた事である。此書の首卷には進獻の文が收めてあつて、樂翁公の自筆の和文も共に收められてゐる。山陽の文には、

不レ圖邸吏帶閣下之命、來就<sub>レ</sub>襄家、取<sub>レ</sub>所著私史、欲<sub>レ</sub>賜<sub>レ</sub>覽閱、禮意殷勤、愧悚交至、夫襄不<sub>レ</sub>敢求<sub>レ</sub>於閣下、而閣下求<sub>レ</sub>於襄、襄之榮大矣、復何所<sub>レ</sub>嫌而辭避乎、

右の如く山陽は見識ばつたことを云うてゐるが、公から求めたにしても、獻じたことには變りは無い。乃ちこれはデデケーションの明かなる一例である。

標原製



古く南北朝の頃に遡つて見出す一例は、虎關禪師が元亨釋書を著して、時の天子後醍醐天皇に進獻したことである。虎關が元亨二年八月十六日此書を獻するに付ての上表は巻首に收めてある。それに依ると、

如<sub>レ</sub>是至寶不<sub>レ</sub>敢私蓄、敬<sub>レ</sub>上陛下、弗<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>替越<sub>レ</sub>耳、云云乞降<sub>レ</sub>中書<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>官校、若有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>采、入<sub>レ</sub>大藏<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>天下、於<sub>レ</sub>戲璵璠<sub>レ</sub>之玩弄

王者之事也、匹夫唯輸<sub>レ</sub>貢而已、然則此書之流播陛下之任也、云云

虎關は如斯く稿本を闕下に獻じ、官の校訂を経て、若し採るべしとすれば、一切經の中に入れて廣く天下に傳播せしめられたい。斯くの如きは陛下の責だと云うてゐる。虎關の進言は随分露骨であるけれども、進獻の一例として著名のものとなさざるを得ぬ。

水戸の進獻本は一にして足らない。就中大日本史は最も著名のものであるが、時代から云ふと、それは文化年間の事に屬し、近い時代のことであるから順序として後に廻し、徳川光圀が禮儀類典五百十卷を闕下に獻じたのを先づ挙げねばならぬ。此書は貞享三年秋より編輯を始め、成功の後右大臣藤原公親によつて奏覽に供し、書名の勅賜があつた。又光圀が弘仁より承應に至る間の名人の遺什を名山靈區に探り、之を編輯して三十卷となし闕下に獻じた扶桑拾葉集も亦書名を勅賜された。乃ち進獻本に書名勅賜の例として爰に特記を要する。

大日本史は進獻の上表を巻首に收めてある外に、別に叢覽の次第を敘

の冒頭に附してある。それは左の如くである。

專據<sub>レ</sub>國史、博考<sub>レ</sub>群書、爲<sub>レ</sub>三部之書、昭代之美事、堂構之業、勤勞可<sub>レ</sub>想、

右のごとく聖旨を刻することは、支那には多く例があるが、日本に於ては稀なる例である。

將軍に獻書の例も少からずあれども、手近の例は林道春が正保年間に日本紀以來の國史を參考し、繁を刪り要を取り、闕を補ひ遺を拾ひ、宇多の一朝を加へて、纂輯四十卷となし、本朝編年録と名づけて將軍に獻じたのが著名の例である。道春歿後其子春齋が更に續篇を作つて進獻するに至り、書名を本朝通鑑と改めたのは將軍の命に出づるもので、是も亦賜名の一例と見るべきである。

日本の進獻本の例はいくらもあるが先づ以上に止め、更に外國の例を案するに、差當り日本に關する圖書の範圍に一二の例を挙げることが出来る。乃ち有名なマルコ・ポロの東洋紀行の巻頭を展べて見ると、一枚の餘白を割いて、國王に捧ぐと大書してある。又千六百四十五年佛國で譯したピントウの東洋紀行には、著名な僧正、カーディナル・リシリニに捧ぐとあり、一千八百三十四年アイザック・テツチングの佛譯した日本王代一覽はムンスター伯に捧ぐと明記してあるなど、進獻の例は澤山あつて一々挙げるのが煩はしい。

標原製

した一文が載せてある。それに據ると、文化七年の冬、大日本史の刻本に上表を添へて京師に送り、關白藤公の内覽を経て、十二月朔日藤公より御覽に供へ、皇上の嘉賞を得たことを敘し、聖旨は特に朱摺にして卷

に思はれるが、實は神佛や高貴の人に捧ぐるのみが進獻で無い。由來進獻は一種の敬語であつて、目上に對して多く用ゐられる語だが、廣い意味で進獻の場合を云ふと、随分複雑である。又進獻と明かに斷つて無くとも進獻と見らるべき場合もある。書物の序や例言などに誰れの爲めに此書を作つたとか編したとかあれば、それが矢張り一種の進獻本である。或は君公の爲めにし或は父母の爲めにする如きは、明かに進獻の字が嵌まるのである。乃ち君公に諫を納れる爲めに書いた文の如き、又亡き父の志を繼いで完成した著述の如きは、何等の表示が無くとも君父に捧げる性質のものである。私はデイクーションと云ふ言葉を軽く取りたい。誰れの爲め彼れの爲めとあるを矢張りデイクーションとしたい。著書の中には子孫の爲め或は門人の爲めにする例言や序に斷つてあるのがある。その中には子孫門人を藉りて謙遜で云うてゐるものもあるが、一概にそんな文字に捕はれず、其の實體から判斷して其の然ると然らざるを推定したい。子孫の爲め門人の爲めにするとも實は廣義のデイクーションである。

多くの場合デイクーションは謝恩の爲めにするものである。例へば

支那にも勿論澤山の例はあるが、此の短篇の記述には枚數に限りがあるから、それは省略する。

以上挙げたいいくつかの例で考へると、進獻の問題は甚だ簡單であるか

其の産物を捧げるのは自然の情誼であらねばならぬ。尙ほ著述に對し直接何等恩恵を受けないにしても、他に深甚の恩誼に浴したことのある人が、それに酬いんとしても酬いる方法が無いので、著書を捧げてせめてもの情を遣ふこともあらう。

謝恩の爲めに圖書を獻するの例は餘りに多いから特に挙げるに及ばないと思ふが、謝恩の爲めながら、愛書家に圖書を刻して獻じた内外一對の例がある。如斯きも亦獻書の一體であるから、爰にそれを挙げて見よう。一千八百二十三年頃、英國にスペンサー卿といふ好書家があつて、殊に豆本を好み、書肆に命じて出版せしめたものも少なくなかつた。書肆は其の眷顧に對し、種々の豆本を作つて進獻した。私の所持してゐるのは、ダンテのデヴァイン・コメデーであるが、巻首に進獻の意味が刻されてあつて、巻末には進獻の爲めに作つた豆本の目録が數種載つてゐる。其中には沙翁全集の豆本も見えてゐる。日本で同じやうな例を求めると、書肆慶元堂が宋本參校經典釋文三十冊を翻刻して、吉田篁墩の靈に捧げた一例がある。慶元堂主人は老泉と云うて篁墩に師事したもので、書物の出版に就ても種々の指導を受けた恩誼がある。篁墩は平生經



自家の著作や研究を助けた人に報恩的に其書を獻するのは最も自然の事である。その研究を助けたと云ふ内には、多くの材料を供給してくれた場合もあらうし、衣食を與へて生活を助けたと云ふ場合もあらうし、刻費を出してくれた場合もあらう。或は著作を爲す迄に頭腦を開拓してくれた師恩に感謝する場合もあらう。以上は皆著作の出産に直接の關係があり、これ無かりせば出産が無かつたかも知れないのであるから、恩人に

示さんとするに、友人が故人となつてゐる場合などに亡友に捧げる例がある。或は友人に某の書を著すことを約束したのに、其人が故人となつた時なども、其靈に捧げるやうなこともある。哀悼の詩篇を故人の靈に捧げたり、愛の詩歌を情婦の靈に捧げたりすることもある。或は皮肉に政治の得失を論じ警醒を庶幾する目的を以て國務大臣に捧げたり、非違を弾劾して警視總監に捧げたりすることは、共に其人の閱讀を促す趣向から出てゐるのである。或は懺悔の告白を、嘗て己の行動に忠告した人に與へるごときことも稀にある例だが、以上は謝恩とは全然異なる場合で、デイクレーションの動機は頗る複雑である。

典釋文の佳本を得たいと苦心したが、終に得ることが出來ずに歿したので、老泉は後年漸く此の書を手に入れると、篁墩の志を思ひやり、之を顧刻して發賣に先ち篁墩の靈に獻じたと傳へられてゐるが、これには人情味の濃かさが感ぜられて、美談とするに足るものがあるやうに思ふ。謝恩以外の進獻の場合を案するに、いろいろの例がある。其の一二を擧げると、友人の著書の誤りを正したり、或は駁論を書いたりして友人

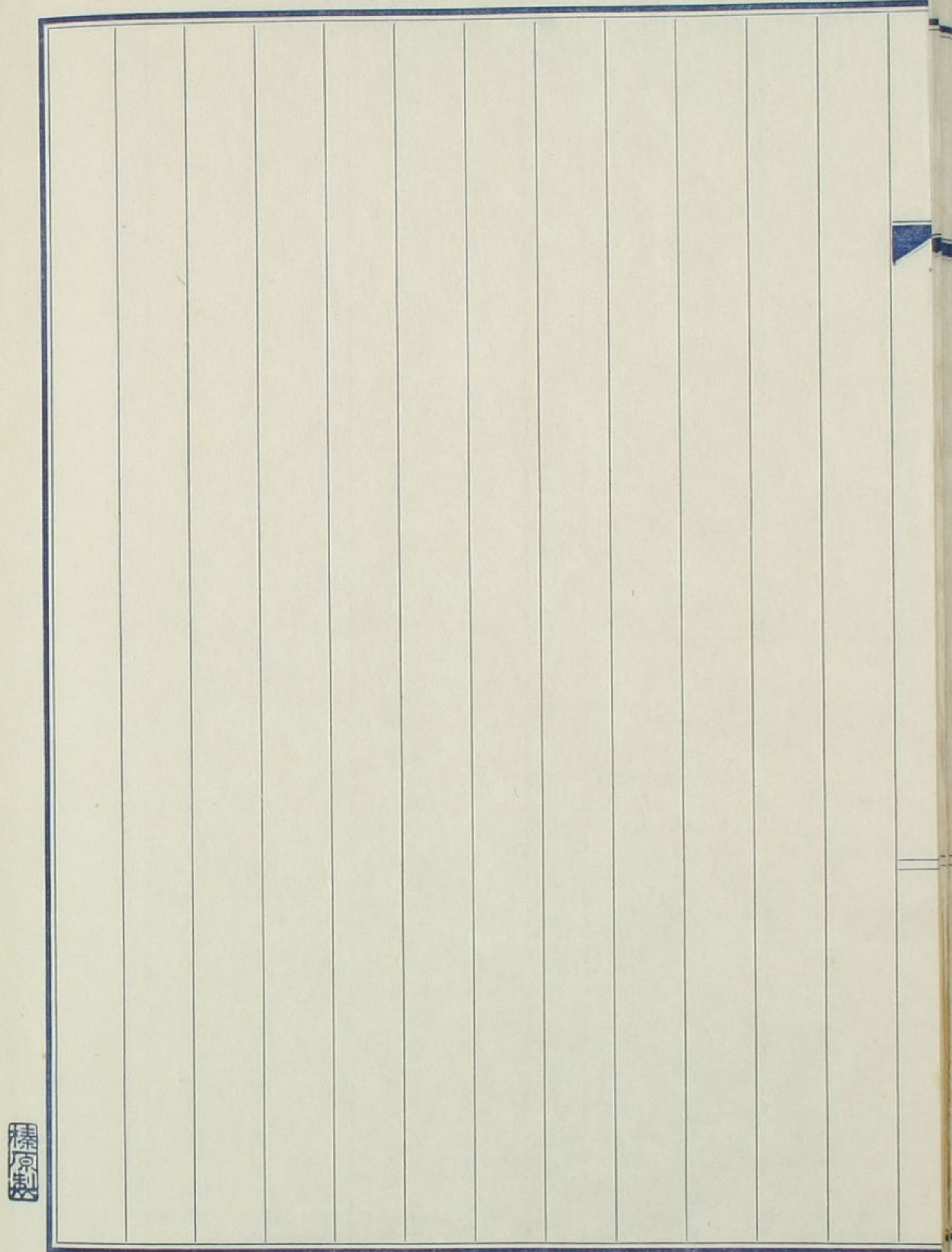
と書くことは著者としては大切な記録である。公刊の圖書であるからと云うて、著者の心事を書く可からずと云ふ道理も無からう。誰れに捧げるとか獻すると云ふことも實は其の心事の發露に外ならないのであつて、寧ろ文學界の道義と見るべきものだと思ふ。唯問題とすべきは、デイクレーションが著者の誠意に出たのでなく、これを以て人を釣り、これを以て自家を宣傳するのである場合に於て、之を許すべきや否やと云ふが問題である。近來の如く獻題の由來をよくも窮めず、譯もなくそれが濫用されるに至つては、杉森氏の如き説の起るのも偶然でないと思はれる。

ニシキヤ  
ニクシク

杉森製

進獻は多くの場合偽らざる人間の至情の發露で、文學上の道德と見るべきものであるが、しかしこれが往々にして何等かの方便に用ゐられる事がある。例へば天子、將軍、諸侯に獻書する場合でも、其の嘉納を得ることが、やがて其の著書を重からしめる所以であるから、兎角不純の野心が潜み勝ちである。最も陋醜なるは賣名の爲めにするので、縁故もない時めく人や、一面識もない名家に麗々と捧げる旨を現はすごときは、露骨なる自家宣傳で、近來は可なりこれが流行してゐる。此頃發行された文藝春秋に杉森孝次郎氏が「獻題」の一文を寄せ、デイクレーションは本來著者の私事に屬する。公刊の圖書に私事を挾むのは讀者を侮辱するものだと痛撃したのも、畢竟獻題の濫用を憤慨しての説であらう。私も半ばこれに同感を表すものだが、濫用の故を以てデイクレーションの慣習を全然排除することには一概に同意を表しかねる。私を以て云はしむれば、著者が著述の動機を書いたり、誰れに負ふ所があるな





様原製



學 藝

### 大隈講堂の鐘に就て

早稲田大學 工學士 前坂重太郎

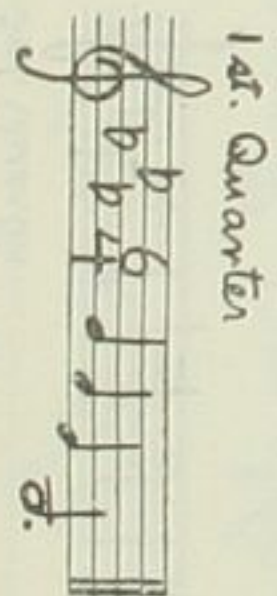
稻工會雜誌第四號紙上に、大隈講堂塔鐘の音樂的效果に就てと題して、鐘のメロデーに關する論説が載つてあつた。そこでそれを機會に、あの鐘について少しく述べて見たいと思ふ。

早稲田にいつか大講堂が出来たら、チャイム・ベルを取付けて、時間毎に校歌を打たせて見たいといふ話は、すいぶん古い昔から、誰言ふとなく口傳へに一つの希ひとなつて傳へられてつた。それが此度、大講堂の建築に際して實現したわけで、誠に結構なことである。資金の都合で、校歌のメロデーを打てる様な、全部の鐘を揃へることは出来なかつたが、所謂、樂聖ヘンデルが作曲した、オールド・ケンブリヂ・チャイム (old Cambridge chimes) を打つことの出来る、F、變B、C、Dの四つの鐘を取付けること、なつて、米國パル

チモア州、マクシエン・ベル・フランドリー會社へ注文せられた。

所でどういふメロデーを打たさうかと評議の結果、オールド・ケンブリツヂ・チャイムの全部を打たすことは費用が高んで到底不可能だし、校歌のメロデーを用ひようと試みたけれども不充分であつたので、そのチャイムの内あまり長くない、また短くない、3rd. Quarterを打たすことに定められた。それが現在打たれてをるチャイムで、それを打つやうな機構の製作を名古屋の愛知時計電機株式會社へ命じ、漸く昭和二年十月二十日講堂開館式の前夜に出来上つたと云ふのが鐘の由來の大體である。

所でこのオールド・ケンブリツヂ・チャイムについて少しく述べて見なければならぬ。これは次のやうな五つの曲から成立つて 1st. Quarter は十五分に、2nd. Quarter は三十分分に、3rd. Quarter は四十五分に、4th. Quarter は三十分分に、5th. Quarter は四十五分に、Hour. を時の数だけ打つもので、鐘は早稲田のよりは大きく變B、變E、F、G、の四つを用ふるものである。



1st. Quarter

さすがにヘンデルの作曲だけあつて、各曲は夫々時間の氣持ちとびつたり合つて、些の變改もゆるされるものではない。こ

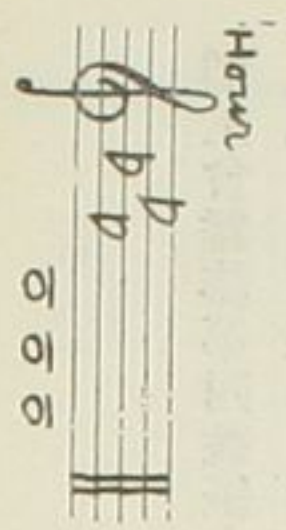
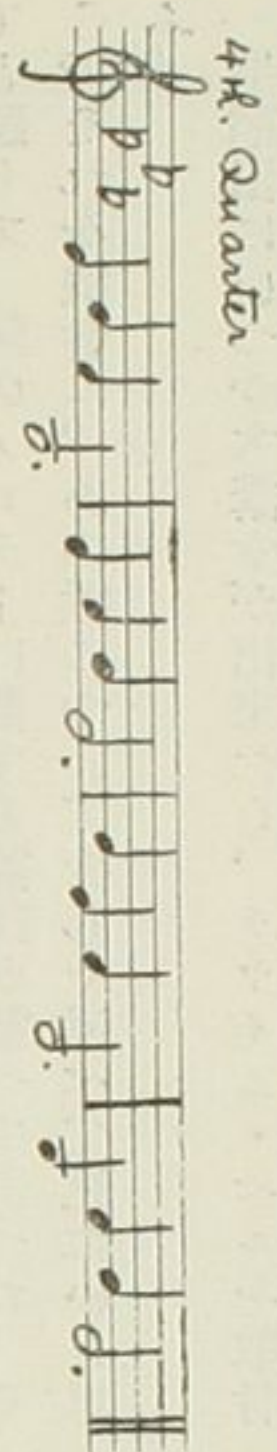




2nd. Quarter  
れを勝手に取扱つて時  
間のところを1st. Qua-  
rterを打つたり、3rd.  
Quarterを打つたりし



3rd. Quarter  
たら、此の  
樂聖の各曲  
を冒瀆する  
のみなら



す、全然無意義、寧ろ不快の感を與  
へること無論である。之等の曲を音  
樂的に分解説明することは専門に渡  
るから、此所では省くが、このチャ  
イムは、所謂ウエストミンスター時計といつて、市中にこの  
ケンブリッジ・チャイムを打つ時計が販賣せられてゐるから、  
諸君の内でもそれを聞かれた方も少なく無からう。それは誠に  
氣持のよい安心と、希望を與へる旋律である。

所がこの音樂的意義について充分の注意が行き届かなかつ  
か、不幸にして四十五分に打たるべき 3rd. Quarter が採用せ



3rd. Quarter  
られ、  
時間毎  
に打た  
れてを

るから誠にをかきなもので、聴く者に不快の感を與へるのは  
仕方の無いことである。鐘の取付が終り、愛知時計で鐘を打  
つ機構を取付けてをるとき、チャイムのメロデーはこゝだと  
初めて自分に示された時、驚いて訂正する様努力したが、既  
に機構は出来上り開館式の期日が迫つてをるので間に合は  
ず、更にその第三小節だけでも取り除くやうに（第一と第二  
節では曲の出発は不完全であるが、終結が完全である爲め、  
第三小節を除けば



の様に音樂的には差支  
へ無い）奔走したけれ  
ども、機構の關係で（機  
構を全然取り換へなけ  
ればならぬ）残念ながら其儘用ふることになつて今日に及ん  
でゐるのである。

然し、當局に於ては此事情はよく承知してをるので、此機  
構は取り換へることになつてをり、更に來る創立五十年祝典  
迄には鐘を増加して校歌のメロデーを打てる様にするか、ま  
たは鐘は現在の儘とし、オールド・ケンブリッジ・チャイム

を完全に打たすか、或は校歌のメロデーから新らしいチャ  
イムを作曲して打たすやうに仕ようと、近くその準備に取り  
掛る筈であるから、遠からず壯嚴なワセダ・チャイムが彼の  
雲表に聳ゆる高塔から時間毎に聞かれるであらう。而も尙ほ  
幾世紀の後になつても、なつかしいオールド・ワセダ・チャ  
イムが続くことであらう。

の從來と云ふ文字の書簡の文例も多く用へる  
消し從來の漸從來をい何る程もあつて  
從來よと云ふ古簡の例と扱めてゐるや  
バ、後世の安宅の書簡の折ぐれと云ふ  
從來の巻物と云ふよと書簡と解し  
得へきか、いんこ就て今今の辞書若心の天  
家ゆふ解と述つてお久張清と從來



風のよのと思つてみるが、全体往来といふものの起る、大友良の寺院の寄附帳から始り、僧徒が法圓を此の如く、所と通つて、とろろまむ、そんが寄物とろりてみる、勅の頭、何の講往来と、あつた例とろりてみる、こんふの寄附者の名を追々書きつけたら、安宅の由りある、往来の巻物といふ、ある、こんふ木品陽の品陽漫草、出、こゝろ説、その本文の左の如くである

標原製

○往 來

南都ノ興福寺ニ春日邊往来アリ、圖ノ如シ安宅ノ詔ノ往来ノ巻物ハコレナルベシ、元來今ノ西國ノ通  
 リ手形ノ如クコレヲシルシニシテ、國々ノ關ヲ通ルニヨリテ往来ト名ツケシトミヘタリ

四面ニ書付アリ

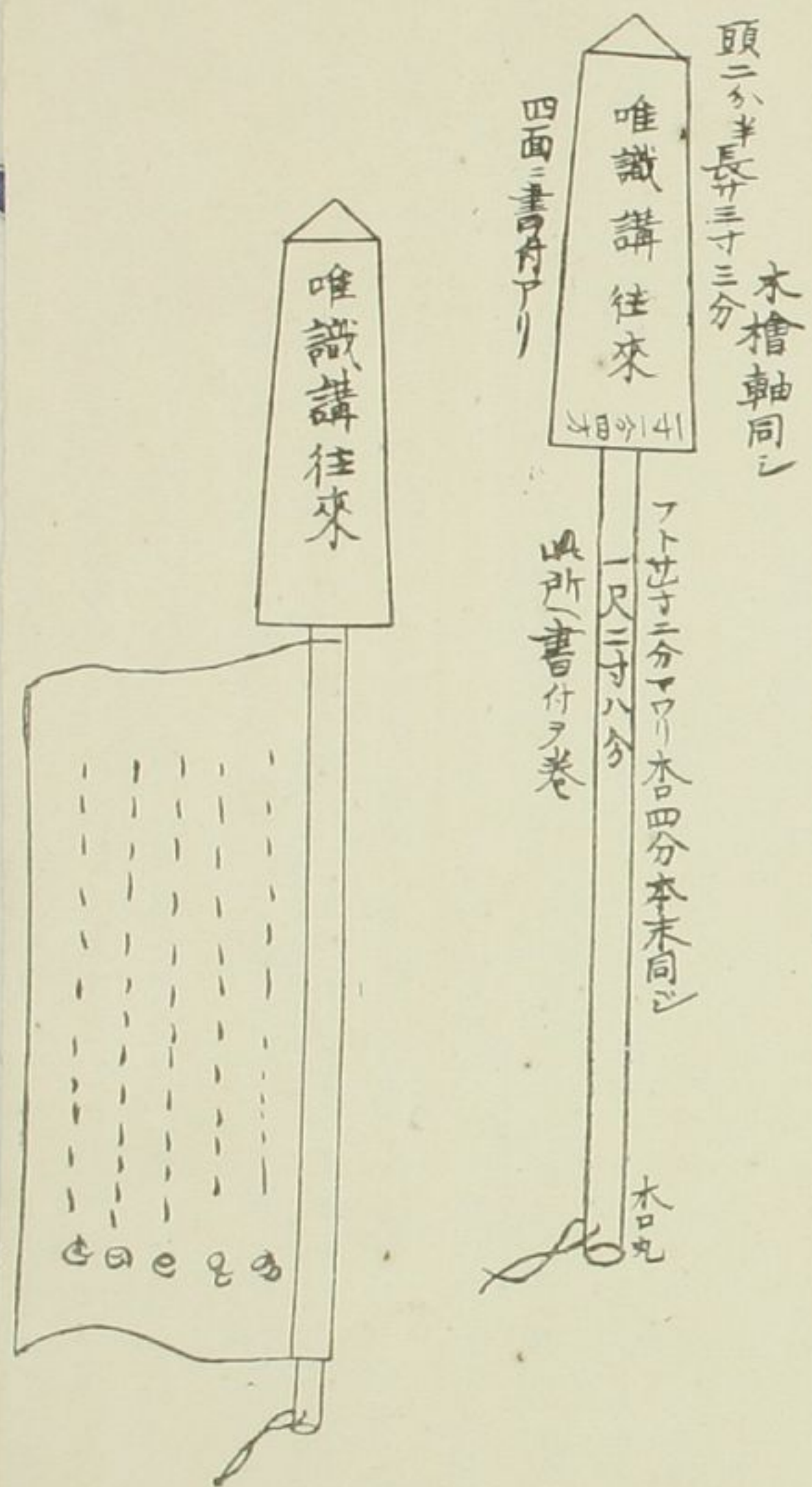
極リタル寸法ナシ、四角ナル頭ノ木ノ長サハ、書付ノ文字ノ數ニヨリテ長クモミジカクモスル也

一面 春日社

一面 唯識講往来

軸ノ木ノ長サモ字次第也、國柘紙又ハ半紙ヲ用フル也

一面 判一ツ何院





軸ノ始ニ施主之願文、次ニ寄附ノ式目ヲ書キ、次ニ施物ノ渡シ請取ヲ書キテ加印ス、年々ソノ次へ紙ヲツギタシ、書付テ卷オクナリ、外ヲ文卷ニ卷キ役人寺々ヲマハリ、請取印ヲトル、箱ニ入レ置クモアリ、箱アルハヒモナシ又ワリ竹ヲ用ヒ、頭モ軸モノベ付ケニ作ルアリ、又頭ヲ木ニシテ軸ヲ竹ヲ丸クケズリ、或ハナヨ竹ノ

丸竹ヲ用フルアリ、サテ額合物等ハ幡ニア  
ル着列ト云フハ往來ノコトトんべし、関東  
ニテハ往來を着列ト云フニヤ

古代の往來ハ僧侶に限る所ありの手形  
の代へたよりある在残ハ近の世檀那寺ハ  
信徒の旅りニ際テ旅行書とて流すこと  
を往來といふことハ往來集巻に記すこと  
以上は往來に關するもの考証を記す其の概



取を記す

の三村竹海の本の註「取數四万五千六百十頁のこゝに出  
取のつき難ありて誤あり、隨見隨すの免出を未  
七集のりるもみらんともぬち家の巻考とす海  
のふも也、保」此行のよが果とて考えんらう  
と、思ひぬ、傍心回自五十五とつゝ今時不考  
のよ也、自分もともちの問、問者、孰と筆紙  
し、考ふるも、人、是に刊行せりと勸め  
らん、考ふるも、古、國考史の記事  
と一冊とし、ハ、所、流布の免、入るも、取、數  
次、考、行の、隨、筆、中、一、多、く、挿、入、一、保  
し、竹、海、の、著、者、孰、と、考、へ、ら、ん、國、考、史、の、こ



ことば、優めの一書とす。置け心或は用入主つこと  
 女あんと、急、胸臆、うし、えん、近、臨、暮、入、ん  
 たり、よを、案、出、し、漫、く、目、録、を、心、つ、て、見  
 ん、忍、ち、九、十、は、分、り、七、ある、尚、ほ、往、年、の、圖、者  
 之、取、録、其、他、の、書、留、を、搜、る、心、少、か、ら、す、材、料  
 を、得、る、と、あ、ら、う

（中四）の六六

- 一 近 献本
- 一 愛書振
- 一 刀剣録を漢出
- 一 古詩大観の跋
- 一 依家山の春秋命辭準繩
- 一 韓非子對異毛純の稿本
- 一 宇田四川校書日記本

標原製

- 一 ロビンソンに似ル日本人の漂流譚
- 一 徳川期市井風俗志料
- 一 反故ハ景
- 一 山陽と麓嶽
- 一 翁反故
- 一 山中共古の讀書物語
- 一 森有禮遺 雖いんどきふ
- 一 云本保卷のり
- 一 全汲名新々二種
- 一 目録應用の趨勢
- 一 馬場の遺史を辨るる始末
- 一 白鳳経



- 田中伯と六朝字本皇流の義疏
- 活字因縁
- 古状揃
- ハシタトト完悦
- ホス夕トを集めて
- 字本禮讃
- 覆札と合二訛
- 書物の装釘二訛
- 国書愛知雜感
- 長崎版唐人屋敷
- 種彦の日記と古簡
- 板倉山湯書と己けり金石文

- 心概自筆の百花詩集
- 六抄因自筆狂歌集
- 黄沼英と付く御府本を記す
- 尾子経
- 芳泉三浦梅当座日記
- 杉浦武重の完曉斎書簡
- 七世豊山の古簡集と伝
- 塩谷宏陰最後の書牘
- 木戸松菊外帖(中)の書簡
- 宗淵自題山家本法華經
- 興福寺の花大乗流經
- 小糸丸経



一 古歌九経

一 諸家評註 爲井外詩行

一 山陽歌評 八大家文 并三物宮茶

一 草書歌今版本

一 米庵百葉譜 五本

一 近家正音のり

一 留家前日誌

一 水原露石のり

一 四書刊行今の成蹟

一 篤胤手稿未好命歴考

一 准拠影圖書考

一 五名物語

一 秋萩の語

一 歌書三種

一 流字本南海紀事

一 達生因説

一 全身釋名

一 東寂山増上寺何書以外入り

一 後和名之元永江口回

一 松本領山

一 支那軒集

一 福池梅庵の自筆本

一 爲上房の自鈔本

一 爲尾后卿自鈔江書



- 聖上と帝四回考級
- 秋田の神陽と解体新出
- 板書の花巻印
- 石川大山の滑權 二本
- 甲子夜話の稿本
- 桂園の抄説
- 漢銅印書の一考を得る苦心
- 花巻聖堂の圖書同治時代
- 内閣文庫の圖書を同治の代
- 正倉院書の皇清注解を呈す
- 丹府の支那守山使の親漢印
- 山陽と蘇氏印略の叙



- 僧上寺の一切位
- 市野迷庵の圖書識語
- 山中仙齋の古字經
- 琳琅閣
- 板木二程 臨摩高松宋石條
- 文晁画樂の古字の元湯宮像記
- 板書と字生家
- 平瀬家の延印譜 七録印譜
- 東寺真福寺の圖書を記す
- 前田松雲の圖書蒐集
- 天海花雲世南集の古字



- 小竹詩笈 朱刊本
- 鷄肋雜爨
- 常麻曼陀羅圖說 二版
- 五岁半童 稻花家評
- 道運役行者初稿
- 隨筆文章選集 一、二
- 書目の書目
- 花園幾法
- 一口刺活
- 蔬果争奇
- 隔簾表影録
- 古鑄百印

標原製

- 菊池宏角の坦唐画像
- 兒島島海漫草本城在画説
- 近世本大子
- 伴友三郎の古大眼位建歌
- 古相(豆)松本行成大老松本
- 室在工の伝 筆山字馬路の古様
- 田理三台
- 高田藩六年の熊鷹研究
- 安田邸の欣賞會
- 小政祖遺 三受の筆 并遺書
- 名家手稿雜考
- 昔春之日誌

九  
二  
万



竹清の類聚と倣を本の逸業を以て書かるとすんば  
 材料の決りしを之しからず吐嗟男ひ出る目と半日  
 書きつけたるんば百十数と上る尚ほ各所目  
 書晴し珍籍題設おと控へて旅業を換  
 せん心百餘の如くおとせん。の多少回者、執り何  
 等の特記を要するともあるんばその折くの難解  
 其の記載あり、せんを檢出と譯言せば原  
 稿の容易なる成るべし、公刊に敢て期する所、  
 女とてんども、閑あふん、毎纏めをおく可とせん  
 歎  
 十月三十日記  
 ○竹清の本の流しを誤んば、自分の末に知らせしむ  
 實を橋記すんば



一 小中村清矩々七と狂歌ゆきうしから四巻あると  
 ううしとあり由  
 一曲重下馬路千羽師匠を多し、竹頃子流のり  
 入りたることあり、ふり流の千本馬路の道む  
 中へありとあり  
 一 家亡滅の時の或る出来事とを補文うて記  
 してありあり、博採校心、近代輪記書喜  
 多可庵の画、色摺繪、書名のはつは  
 るとありあり  
 一 月雪雪鼎の春書、かきとて、印んてある  
 が、實に二見候ある画家あり、金玉書漢  
 の漢文の故とあり、北人病身とあり



曰 彦彦、あつて氣業、家族を遠くけし、  
吾輩、春書を執筆、人が答ふらん、  
曰、さうと云ふ、さう

一 狸講集説ハ村田了阿の著とす、  
八福山の儒太田全富の著のう、  
考証を挙ぐ

一 町田石谷の傳抄書、  
一 石谷家傳を跋字せしめし、  
多田かよ紙が手習を、  
る紙が、  
此、

一 依之河原山の書家、  
洋書を



き、  
次の述目鏡の外装、  
の家山を、  
戴、  
入、  
先生、  
ル、洋書を述目鏡と誤り

一 成崎柳北の著、  
幾、  
古、

一 山本、  
是、



坊僧の人をいふ竹の人をいふ北人旅中何と感  
 してか小椋の池の岸に結緗の如織をぬぎ  
 髪を束へて髪めを剃髪茶を一服く下駄  
 を揃く入おしれ

一河内鐵堂の花寺印「衣簾食菲辛苦  
 所存不絶永保非我子孫」と刻しあり  
 長江伴准の花印「我死ころを  
 此黄堂に換へらめ」親のまゝとをいふ  
 元ますすまといふといふのわや  
 一寛政の三助といふもの「實は福井三助(楓  
 亭)玉田清助(寛政)禁堂彦彦助(栗山  
 三)二沙村といふ漢かきりくさうとえ



どの三助に六石のちんちんの千石のやむ古  
 念陽片山崎といふる後世七世の侍いんが  
 ちんちんの三助の孫の三助とて轉しとて  
 ちんちん

一北野庵 換言ハ金根庵の三左衛門といひ  
 一人多 将谷庵 津江庵 三右衛門と稱  
 し 市野庵 市野庵 三右衛門と稱し  
 共ニ當時の儒者は任して色を多く二  
 人換言と山の千の某寺ニ入り海士一此  
 換言語ヲ夢中とて家根新を創り  
 小刀とてうか和本巻の柱と創り 市野  
 ちんちん 二入二井候とてちんちんありと松田



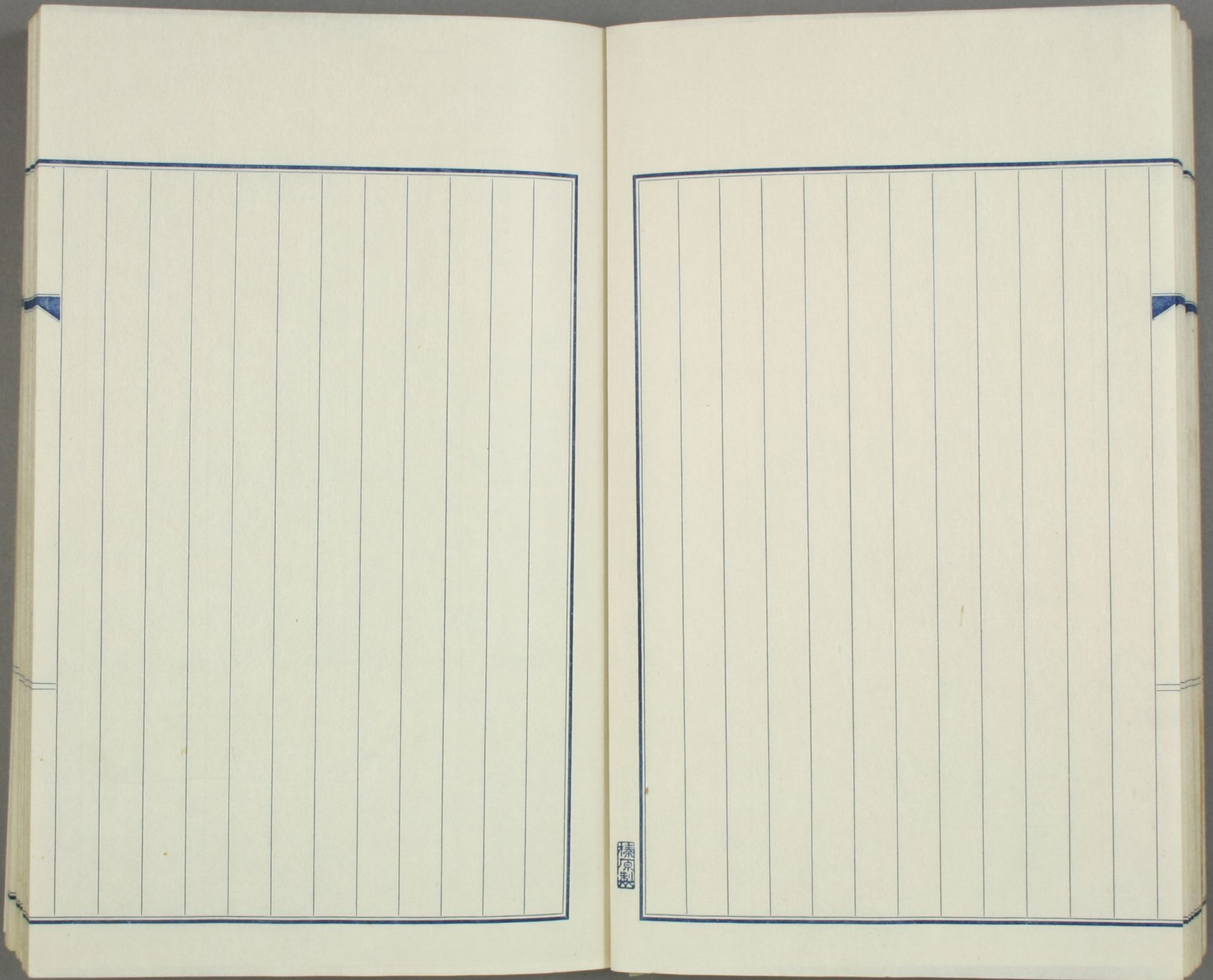
道長とて、慎言、三左衛門、右衛門、

つら、あ、か、

一 瓜洲志道軒、蜀山人、自業、七、  
川名、子、無、輝、字、仲、裕、一字、倫、裕、雅、南、  
條、久、別、號、獨、銚、山人、

上記あり





泰成製



の各回覧のべーバカッターを蒐めええ人と心掛け  
十枚程千入の散葉毎に注高しと仿写と過  
んども去り満ちよのあこむ少しとわ保に高崎  
分梅上にあら工芸美術の陳列ありまうせ  
入つてえ、四寶の法具と巧又を換し高しよの  
中、圓らち七式程かのべーバカッターを  
又の薬師寺具福寺正念院のり物の  
を換し高しよのあこむ少しとわ保に高崎  
あり其の形式全く今のものと然し七葉を  
おろし唯此寺什物にけは柄に刻さんやま佛  
二因のりよのりよと云はしよ、此は美術  
の校りも多く木版のりよを出せども、たあらよ



この比較するものは十年前のものと全く形式の  
同一き紙切ありしことと初めを氣取つきた  
り傍に二十四乃至二十五回と云へは憐れ  
しと云ふやう  
十月二十日  
のえまを自分の談話と人々筆記とを、ま  
を讀んで満足ししことと、或人と一回たりし  
此は西洋人の日本をうらをうらとて法  
話のあらすしとを書き、英語と書くとする人  
と一應法話して、矢を考うると、教行を授け、決  
しと余の行に拘泥する、美んと注書し、  
か、二十枚許、タイプライター、打らるる  
洋文出来、余の校閲を求め、来るやう



リ、之れを讀み先づいつて其筆記を讀む時の如く  
 先づ其の筆を要する所が多少あるべきこと、  
 一、コワく讀んで見れば、其の筆は、  
 七加筆するも、其の筆は、二三ヶ所、  
 又流し、譯の今、余が昔、  
 其の筆を、  
 人の讀まざるやうに、  
 此の譯を、  
 人の理解を、  
 かい子

十月三十日記



右を左に改す

第二回二十一

- 位書の後、日本の公名、徳南、然、  
一 古板、國の石、墨、筆、  
一 福地、自、今、時、平、  
一 竹、清、  
一 旭、花、奥、山、の、  
一 田、中、  
一 六、如、と、支、那、  
一 前、田、家、  
一 名、古、  
一 陵、亭、  
一 竹、井、



古版譜

- 一 益田香齋逸書
- 一 永祿宮本撰撰集 耕堂寺本
- 一 新芳田若海の通鑑綱目抄 改訂
- 一 あとせのひめ
- 一 中村教守稿本西園三志編 自助論
- 一 徳政松平家の書庫を授けし出版
- 一 尊氏兄弟の自守経 前四本
- 一 楊守敬と日本古版
- 一 洋本屋有斐文閣
- 一 島田鞠之丞
- 一 亀井昭陽の書家史
- 一 特別製本江戸各所回令 馬場の回令考

復古記

- 一 古契符里遺族の詮索
- 一 古筆萬葉四種
- 一 寺田望南 談杜州巻
- 一 講義將軍大公方の定まりの書入本
- 一 近衛公の唐六典
- 一 蜀山人の詩稿 安四巻
- 一 高野作深の印「墨公同郡」 杉石刻
- 一 無疑自在版人物活版音人活
- 一 思得故記墨林 墨の香方
- 一 教子廿六歌投標名紙 馬場考
- 一 江安印影
- 一 前所茶心の標本 復 斐田香齋



元リリンの繪本日記 雜向録五

一 秋の國印語

一 多刻の田中良卷

一 十井富印語

一 福川書入康熙字典

一 栲亭和稿江村北海の序

一 養子印家集 立寄木末

一 書林清話の石の歌

一 島本島國印語五冊刻者春前木工

一 高陽文の流り糸の歌

一 山本北山の日本外志

一 黄帝職妻記 支那の逸話と考也

一 東洋文庫の臨州一編 大正活リリン工



一 内閣文庫本の陳列を乞ふ 双魚抄の巻 二十七巻

一 漢古行題跋 玉の巻 同上

一 山口系の方の遺書(稿)挿入の巻 双魚抄 五十九

一 仍振本馬形圖

一 圖書寮の金蘭方 富士川の巻 四十一

一 朝鮮珍本 珠の巻 同上

一 玄原の持人玉屑 京都大の巻 四十二

一 春日尚の祝詞 同上

一 内閣文庫の清朝史料 辰山溪の巻 四十三

一 八持列回着の文正文書 双魚抄 四十四

一 以上 岩崎行又の巻 意の巻 祝の巻 四十五

一 以上 能筆の巻 控へてある四書に就ての目録 四十六



使より見え、旋業の名と巻数を治せり、前日記し  
二日百十二合まんば百六十三、幸す、尚ほ開際迄  
の按字進記せん

十月三十日記

旋業を按すより、前年間の隙間を得て、  
目録を編む事一七二の書冊に纏め、  
ことか書かんとす、漸くその  
事ありしことを想ひ起し、減る家書  
目録を按す、訪書創記、訪書流記  
回書名目録、東屋録、口流日又後、回  
書ハ決等あるを、こん等ハ、  
う回書、親し、旋業、  
のまきありし、約、  
のまきありし、約、



古物に入んて物事に仕ふるあり、之んを  
按出すること、  
うい、  
うい、

○亦開に乗し、千近かり本、  
し回書、  
し回書、

- ・ 和田出村の流刺を包る 酒前等後、
- ・ 田内國本 口上
- ・ 徳川欽印論 口上
- ・ 説文解字義類語 日河、
- ・ 唐文、版本の存在 口上、
- ・ 解体新書の試創 口上、



- 永樂大典卷數 同上
- 古書鑑賞の由来 日撰 訪書續記坤卷
- 切支丹物の興味 同上 訪書雜抄二
- 江戸家の切支丹同書 同上
- 本大史料展を以て 小倉屋松載四
- 醒睡編 同上
- 黄龍公菊徑回字略解 同上
- 一花之語記の傳り 訪書 訪書雜抄八
- 楊惺吾の事 同上
- 全義高瀬海の談 同上
- 書肆河内伝 同上
- 未刊詩文 横濱城之所貯十二冊

横濱城

- 標陽音記 同上
- 奮忠紆難録 同上
- 南浦文集 同上
- 近衛の原六典 白石守春
- 岡田意心菴集の川柳本 斐通巻
- 西卿偽筆の陳之輔 同上
- 倭文子二八代の名あり 同上
- 一有庵の事 同上
- 小川考所 同上
- 大坂園考 同上
- 金鰲新詠 同上
- 内閣文庫 同上

任成漫録

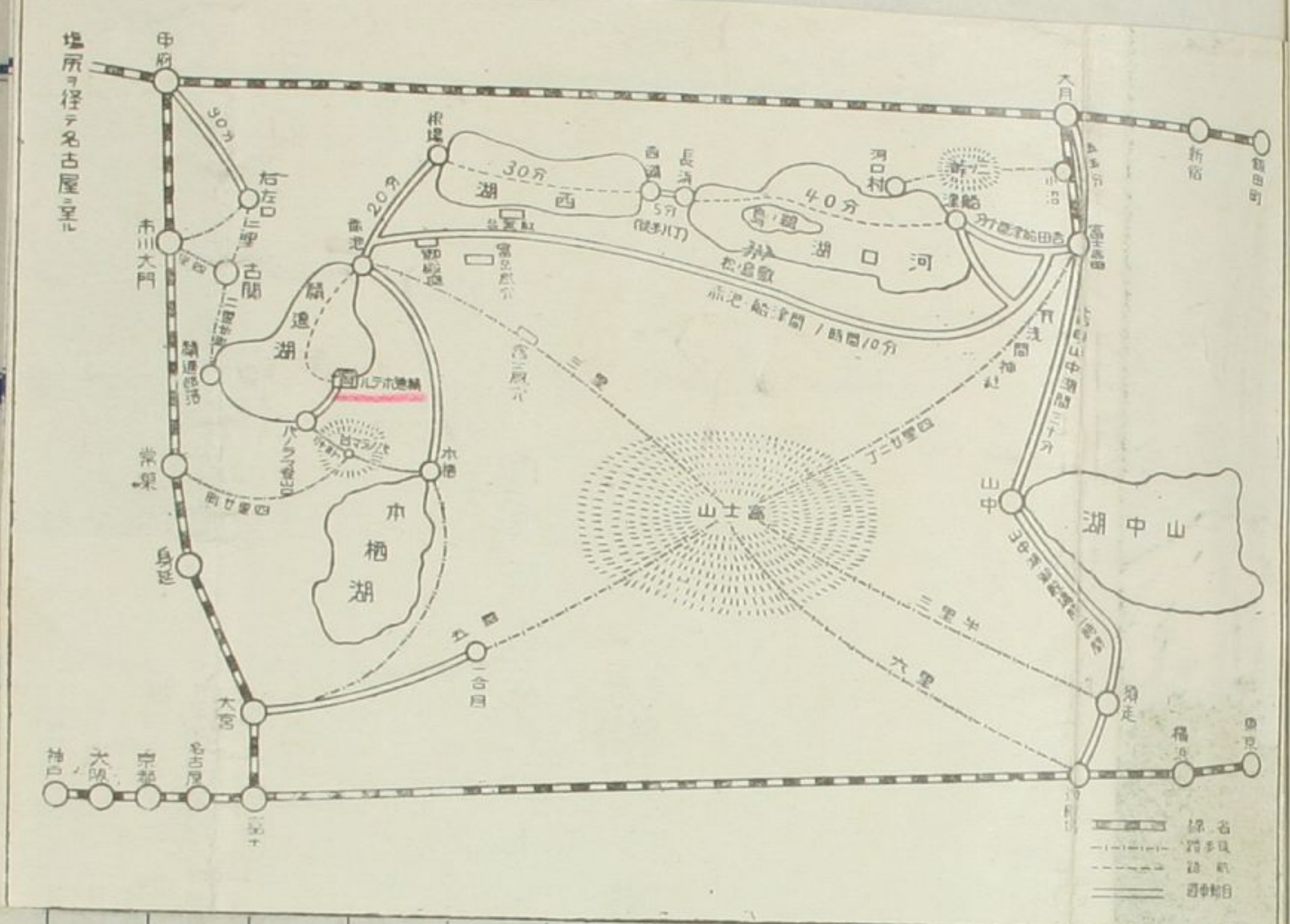


- 山中行天千紙の巻 口上
- 寺門野輪大徳寺の詩叙 口上
- 帝大の宸火：先づ比賣童者 口上
- 平曲と字紙 復出巻終
- 近原南洲の花虫をりん 口上
- 小川の卷子本古言文選 口上
- 平瀬家河内本源氏物語 口
- 欣賞今持守り本 復出巻終  
在終七
- 説文字の序列 口
- 古版冷高徳流のあり出 口
- 馬琴手紙日本外史 口
- 芳艷史刊行録 口

藤原製

- 芝居義成土陣列色の内 補頁 口
- 心羅尼集注 和の歌詠 口
- 早大圖書館の書目 復出巻終
- 田中級：向はるる田中 自撰文 口
- 鉦子三見古言文書 口
- 宮村復也の書劔本日本書紀 口上
- 授書閣模印 復出巻終
- 早稲田の玉の命の枝けを不毛 口
- 西野本歌辭題 自撰 口
- 田中泰の序列をりん 口上
- 茶書目録 口上
- 芳不昆陽所花の古文書 口上



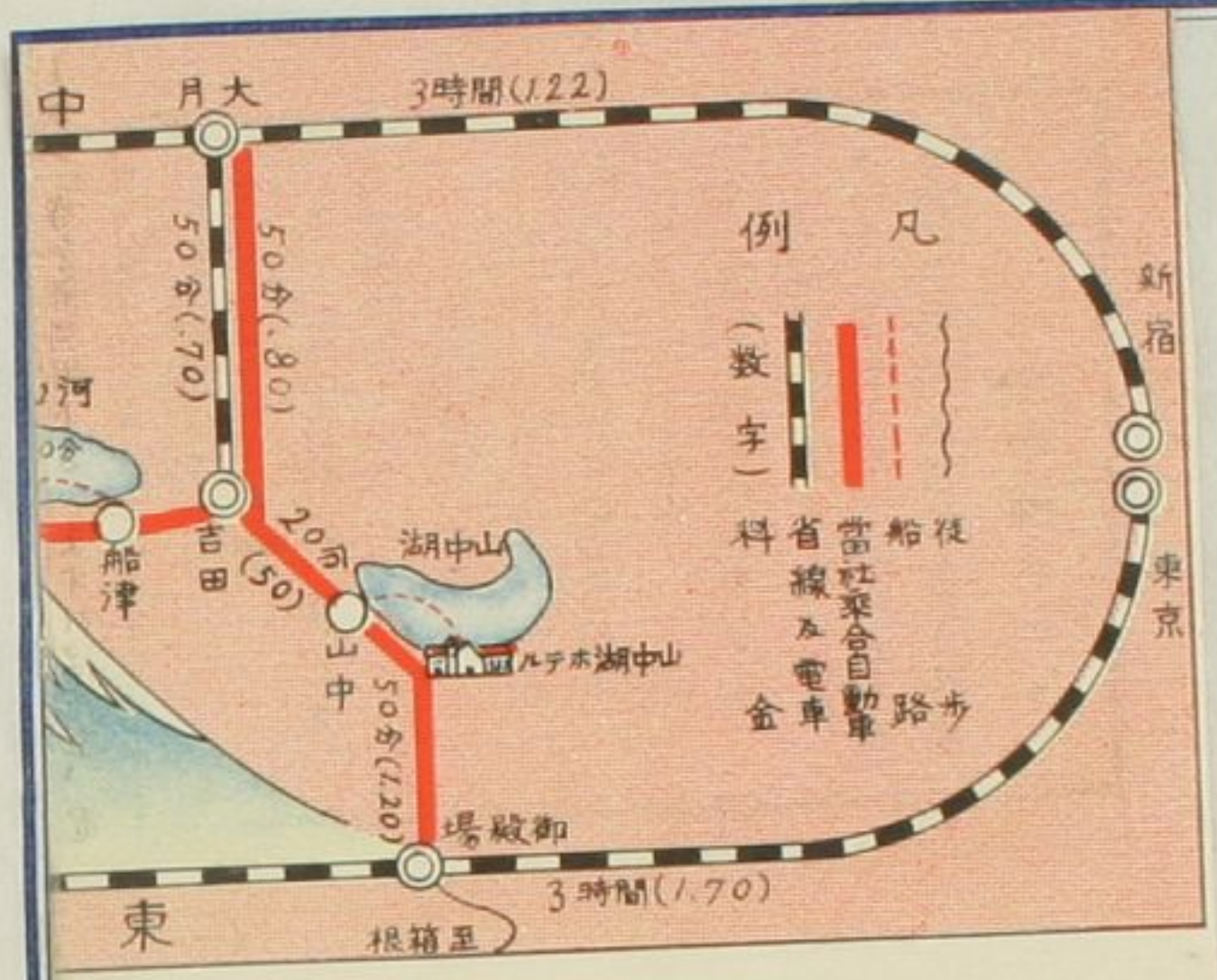


○岳林廉五湖巡り  
 十一月二日三日の  
 ありが日曜祭の、南の  
 の五湖巡りを思ひ立ち  
 同業四社の幹部四人  
 つ計十六人一団とさう  
 二日の午後一時四十分車  
 立野をきり、湯殿場  
 に下車して先づ山中  
 湖を訪ひ湖畔の旅  
 亭に一泊あり、その日  
 各湖をぐるり巡定う

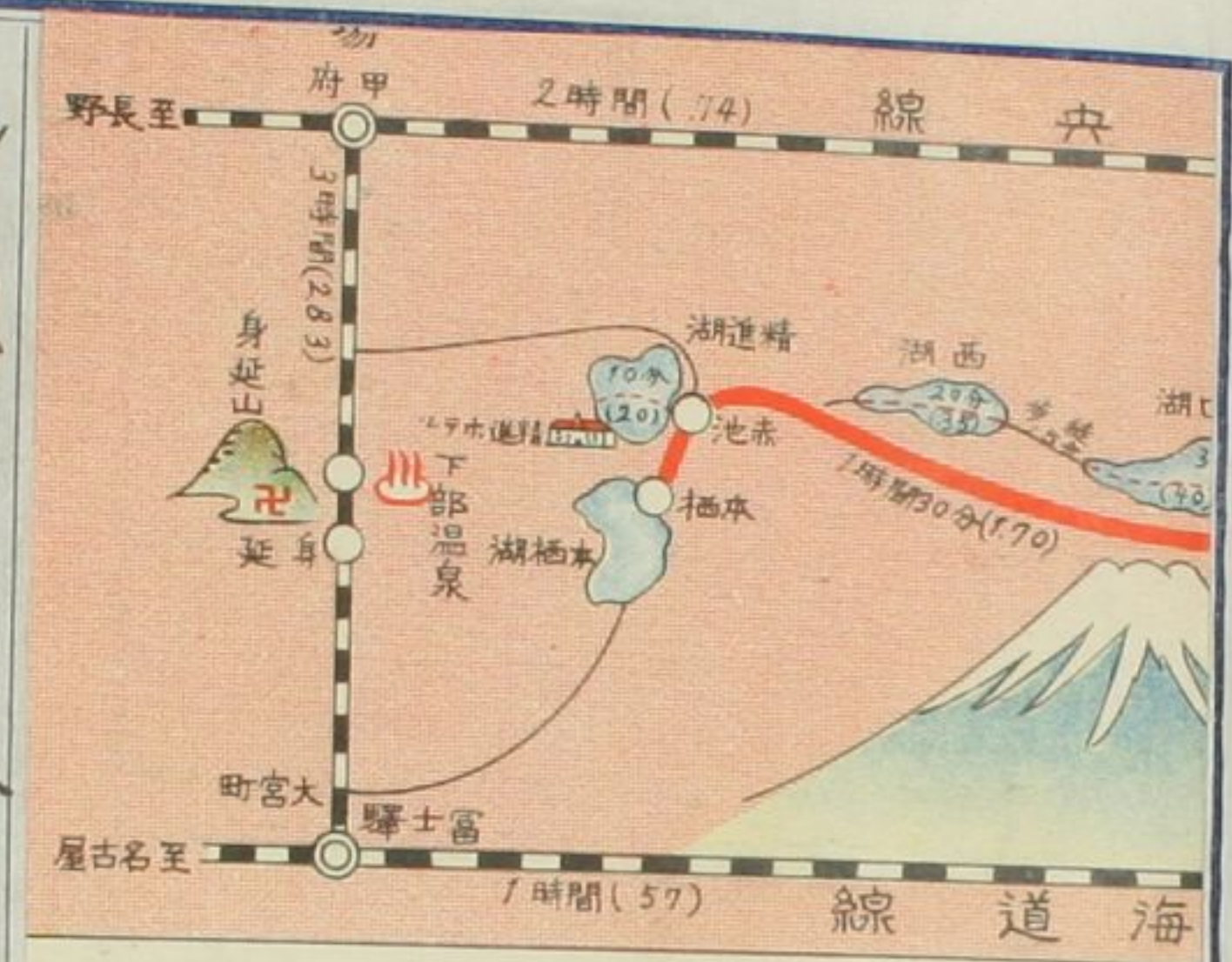
- 一 沼振玉出政方 口上
- 一 足利尊氏の家伝 同上
- 一 龍心輯日本文集 清原孫四
- 一 本屋往來 七折口龍載
- 一 五弓久文のころ 酒前屋次郎
- 一 平秩東心のころ 勝城漫真
- 一 玉屋本小杉権打手代 村松権聖
- 一 医古偽古考 同上

藤原





清原坊も自動車に同乗し、此の朝来雨毛  
 きり、此路の、恰も、行程の刻、入、台、人、也  
 一、天、今、晴、ん、一、行、ハ、仕、合、セ、ト、喜、心、合、ん、也  
 湖、原、坊、も、山、中、湖、を、約、六、里、自、動、車、を、一  
 時、分、を、費、す、途、次、須、走、野  
 を、こ、く、往、年、少、壯、時、代、馬、山  
 振、坐、と、登、山、此、口、も  
 一、等、こ、艾、海、の、風、を、阻、こ、う  
 九、山、中、艱、難、を、嘗、め、り、こ、こ  
 を、車、中、に、追、越、す、尚、味、山  
 中、湖、に、達、す、る、ま、る、龍、崎、の  
 峠、あり、之、ハ、甲、駿、の、分、界

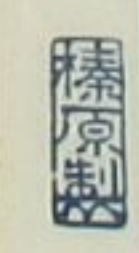


先、敢、て、危、険、を、感、ず、こ、こ、ろ、く、徳、山、嶺、四、境  
 一、連、つ、つ、頃、ハ、不、慮、也、漸、く、晴、ん、と、銀、敷、五、の、こ、と、夫、  
 山、中、湖、を、脚、下、に、敷、一、日、快、走、を、叫、び、こ、う、  
 山、を、下、り、し、湖、畔、の、施、亭、に、投、ず、洋、鉄、日、本

山、飲、る、海、抜、三、千、六、百、九、十、尺  
 日、の、高、地、も、五、湖、ハ、皆、三、千  
 尺、の、高、地、也、其、ハ、此、地、也、也  
 高、山、中、湖、ハ、五、湖、中、一、也  
 高、地、に、在、り、流、石、に、斯、る、高、地  
 一、ハ、雨、霧、深、く、鎖、し、前、程、を  
 并、し、由、ぬ、る、程、も、自、動、  
 車、道、路、ハ、開、切、長、く、也



飯共ニ付り、意お、設備より、一り、日本級を  
選んで為つく、時既、五時をこき、春も共、  
り、七試みる、戸を推して、長江、  
、強人と、人の、向、此、  
、ろ、長、  
流石、此、地、の、岳、林、の、最、高、地、  
木、も、凡、ろ、ろ、ろ、  
啼、か、さ、ろ、ろ、  
別、世、界、に、在、る、思、女、  
酒、と、呼、び、  
才、二、日、の、旅、程、ハ、先、づ、吉、田、ニ、出、て、河、口、西、湖、王、車



上、を、  
口、二、湖、と、  
せん、と、  
從、一、旅、  
を、以、つ、て、  
を、送、べ、る、の、  
六、深、五、十、三、尺、と、い、ふ、湖、山、の、  
あ、ろ、ろ、  
送、く、即、ち、  
前、に、下、車、し、  
境、内、老、朽、天、を、  
思、を、千、古、の、  
湖、肉、圍、二、里、十二、  
湖、山、の、  
浅、間、神、社、を、  
一、回、社、  
境、内、老、朽、天、を、  
思、を、千、古、の、



宮みぢりものと傳へ社殿大華表千二を祀り  
りと傳ふる杉、大木盤に到るまで時味ふ  
をの口より登山する、この先も、北社に詣り  
を例とし、境内に登山才一歩を進める道  
あり、富士山麓に最々丸木の存する、蓋し此  
境内ろん、赤車を駛り船津にあり、船津に  
河口湖畔の赤車を比す、湖の岸、午後再來の時  
に、舟を飛し湖に泛ぶ、午後再來の時  
に、渡り、更し車を施す、舟を度ふ、評ふ、  
矮樹の繁生里の、こころ、一皆皆緑の音の、  
を望する、よあ、こころ、木、る、  
の、名、ある、高、下、蹴、す、  
完、然、村、の、海



の如き、故、あり、故、ろ、ん、  
客、帳、好、夏、と、車、を、駐、あ、赤、北、附、山、に、爪、穴  
と、稱、す、る、名、區、あり、ま、え、を、探、え、ん、と、し、一、行、下、車  
道、傍、に、折、り、て、燒、炭、亂、雜、の、道、を、山、り、二、下、許  
り、道、の、終、る、所、に、板、舎、あり、梯子、を、懸、け、人、を  
巖、穴、の、洞、門、に、導、す、く、人、を、燭、を、指、く、て、入、る、  
余、和、服、を、着、し、入、る、ま、不、便、也、即、ち、洞、口、に、主  
つ、て、内、部、を、窺、く、入、ら、す、と、し、他、の、皆、入、る、  
荒、干、の、距、離、に、進、み、探、検、し、ゆ、く、る、六、層、巾、寒、  
く、且、の、雨、降、り、永、く、居、る、に、倦、く、お、し、赤、車、  
を、祀、せ、赤、池、に、遊、し、下、車、時、は、十、時、三、十、分  
北、安、ろ、モ、一、タ、ー、ボ、ート、に、乗、り、精、進、湖、に、浮



お北湖某外人の言が所とす外人を待つ所の旅館  
を作日つとす一勝区とて早く宜休する所  
リなん言ふ湖の規模小且つ近年洩れぬ為  
の湖を露出し風致旧の如くすべし一見評判  
有るやあるやと人々仰す。而して此家書  
録す心しと録定し以んば村人の言  
舟を定めて崖路を攀ちり木を以て入りて長  
此ま北ホテリ即ち外人の創る所也北湖  
にハのうて甚いと仰ふる言ある長望産するを  
以て湖底多く探りて北台精進湖面を板  
こと更に千三百五十尺羊腸路改路二十  
町を行き又及敷に達すといふと晴馬の設備

藤原

也其のど一行刻愛し一行の深谷に中盤を  
泊りて後赤ホリト乗る赤池、戻り、白鳥  
車を懸つて根場を達す乃ち西湖畔の村  
まよこ、し、舟を却て赤湖の上の人とす。此  
湖の規模小るも精進に比して風致も其の  
深さハ三万尺といふ、七と精進本極と共ハ一湖  
なりしが大室山噴火の爲め熔岩流  
んて三湖と爲すもなりと感ひ然る北の遠域  
を感し言ふ言嶺白雪を包まん僅か腰帯と  
えりや其の雄姿を湖上に見る能はせしこ  
と也船の前岸に達し是れハ可徒歩する長  
濱、川の余中近年穿ちて墜道あり大室湖











聯幅の揚げりう、まの一帖、元りや一系の子子高  
士の山」とあるの句のありは、家を得せたと見  
入つた

もう一つ、梅鉢すへき、大月野のステーション  
二橋をひき、北野の初め、客の所、さうか、  
全四、惟一のステーションと評判のあつた、  
構造、全くと、西五、あつた、四人の建物、  
做ら、丸木の木材を、ゆるが、工を、せ、お、し、  
又、重なる、建、築、也、こ、ん、と、目、の、様、式、の、よ、う、に、  
大改の、久原、部、内、の、あ、り、こ、を、見、の、し、か、観、模、  
ハ、は、ら、ん、し、大、き、い、と、略、さ、し、一、の、様、式、を、  
廊の柱、皆、全、属、性、と、ま、を、あ、ら、わ、せ、る、

軌道の、廢、物、を、利、用、し、て、柱、と、さ、し、な、る、こ、と  
を、し、り、得、た、改、北、口、も、不、石、山、石、を、工、ン、リ  
に、固、め、て、低、き、壁、の、換、り、を、し、り、と、  
こ、二、個、所、出、入、の、口、を、電、り、を、さ、し、建、築  
と、油、和、を、保、ら、る、事、新、く、ス、テ、ー、シ、ヨ、ン  
建、築、の、常、例、を、破、り、異、例、の、構、造、を、あ、  
ら、し、進、ん、だ、設、計、が、ま、あ、ら、

の、多、摩、聖、蹟、紀、念、館、の、田、中、克、助、伯、等、の、肝、煎、る、北、口、後  
成、未、九、の、新、様、式、を、本、行、の、身、あ、の、代、接、し、な、し、行、き  
難、き、( ) 他、日、一、説、を、約、し、こ、の、ま、の、考、お、を、お  
め、お、く

十一月廿九日



多摩聖蹟由來記

言はまくも綾に畏れれど、不世出の英聖、明治天皇は、知しめし、大御代四十七年の永い間、極寒極暑の折柄とても、曾て御轉地御保養等の仰出はなく、帝躬の御遊びとしては全く拜聞し奉る事が出来なかつたのである。御製にも

夏 山 水 (明治三十七年)  
年々に思ひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

と御述懐あらせられたやうに、常に御多端な御國務萬機に御精勵遊ばし、御寸隙だもあらせられなかつた次第である。

しかるに、こゝに帝都の西郊多摩川の畔東京府南多摩郡多摩村大字連光寺の山川のみは、御兔獵に鮎御漁に四度行幸を仰ぎ奉つたのである、而もその御宸遊行幸は御一生を通じ深く御印象あらせられたるものと拜されて畏き極みである。即ち御晩年の御製に

思 往 事 (明治四十五年)  
雪ふれば駒にくらおき野に山に遊びし昔おもひいてつゝ

と遊されたのも正に此多摩行幸の御思ひ出でを詠ませ給ふたのである。多摩の横山、多摩川の水こそ

藤原製

は、御繁多なる 明治天皇の大御心を、暫時にても御慰め申上げたる唯一のものである。山川の一本一草、一禽一魚、皆明治天皇の聖眷を賜りたものである。畏しとも畏し。

多摩聖蹟地はかく、明治天皇四度行幸を仰ぎたるその上に、爾後 昭憲皇太后は 皇后宮として行啓あらせられ、英照皇太后は殊にこの太古の如く静かな山村に一夜を過させられたのである。

大正天皇にも 皇太子として屢行啓あらせられ、今上天皇陛下も亦御幼少の時玉躑を留めさせ給ふたのである。其他東伏見宮(後の小松宮)北白川宮、伏見宮、有栖川宮何れも此聖地を親しく踏ませられ泰宮内親王も亦御成りあらせられたことがある。

回顧すれば五十年前、明治天皇寶算三十を數へ奉る御壯年の時、尙武の叡慮を以て此山川に御遊獵あらせられたるを御ゆかりとしかくも深く、皇室のめでたき御覺えを忝くした多摩聖蹟は、日本國中、他の何處にも比類ない、全く獨專の最大光榮である。國民はこれを子々孫々に相傳へ永久保存し以て聖徳を頌へ奉り聖恩に報ひ奉らねばならぬ。

多摩聖蹟御年表 (昭和五年十月謹製)

明治 天皇  
明治十四年二月二十日 兔 獵  
同 年 六月二日 鮎 漁



同十五年二月十五、十六日 兔 獵

同十七年三月廿九、三十日 兔 獵

東伏見宮嘉彰親王(後の小松宮彰仁親王)

明治十四年二月二十日

同 年六月二十八日

同十五年二月十五、十六日

北白川宮能久親王

明治十四年二月二十日

同 年六月二日

同十五年二月十五、十六日

伏見宮貞愛親王

明治十四年六月十一日

同十五年二月十五、十六日

同十七年三月廿九、三十日

有栖川宮威仁親王

明治十七年三月廿九、三十日

大正天皇 (東宮御時代)

明治二十年八月二十一日 鮎 漁

同 年十月十七日 栗ノ實、茸御採收

同二十一年十月十七日 地理御見學

同二十五年七月一日 鮎 漁

同二十六年十月八日 全

同三十三年十月七日 鳥類御獵

同四十年八月二日 鮎 漁

同四十一年六月七日 全

同四十二年七月十八日 全

東久邇宮妃殿下(泰宮聰子内親王)

明治四十三年七月十八日 鮎 漁

今上天皇陛下(東宮御時代)

大正二年八月七日 鮎 漁



東久邇宮稔彦王殿下  
李王 殿下

昭和五年四月二十日 御遠乗多摩聖蹟地御巡覽

澄宮崇仁親王殿下

朝香宮正彦王殿下

昭和五年五月十一日 學習院輔仁會遠足會 聖蹟地御巡覽

東久邇宮盛厚王殿下

秩父宮雍仁親王殿下

昭和五年十月十二日 多摩聖蹟地御巡覽

多摩聖蹟記念館

位置は多摩村大字連光寺大松山頂上(海拔百四十三米) 明治天皇御獵の節屢御野御立小休あらせられたる聖蹟地点を中心として造營し奉る。  
建築構造は近代式、純鐵筋コンクリート造延建坪二百四十五坪、館の高さ地盤面より四十五尺館の中央に

明治天皇御尊像を安置し奉る、

御尊像は明治十四年二月行幸當時の御英姿を謹摸し奉りたる御乘馬御等身大の御姿。  
奉建 聖蹟奉頌 連光會名譽會長

御製碑

位置は多摩聖蹟記念館の南方一丁の上五本松御野立附近。 明治天皇明治十七年三月御宸獵行幸の節詠ませ給ひたる御製及これに唱和遊されたる皇后宮(昭憲皇太后)の御歌。

御製「明治天皇御製」 (明治十七年)

春の半頃ある山ふかく狩しけるをりに  
うぐひすのなくをきよて

はるふかき山の林にきこゆなり今日をまちけむ鶯の聲

御製「昭憲皇太后御歌」 (明治十七年)

御狩場よりかへらせたまひける日狩場雪  
といふことをよませたまひけるに

兎とる網にも雪のかゝる日にぬれしみけしを思ひこそやれ



おなじをり深山鶯といふことを  
春もまだ寒きみやまの鶯はみゆきまちてや鳴きはじめけむ

正二位勳一等伯爵 田中光顯 謹書

碑石は香川県小豆島産、薄紅色花崗石、日の出型自然石。大き底邊十五尺五寸、高さ八尺、厚二尺乃至三尺、總量約五千貫。

竣工除幕 昭和三年十一月十八日

御手栽の松

位置 御製碑附近。

昭和五年四月二十日。東久邇宮殿下李王殿下御遠乗を以て聖蹟地に御成の節記念として稚松御手栽賜はる。

船ヶ臺天王森

位置 紀念館參道より南へ八丁。此邊連丘中最高の地点海拔百六十米の標点がある、四方展望廣大十數箇國に及ぶ、附近に兄弟莊あり。昭和五年四月二十日東久邇宮殿下御遠乗にて御成、此地御經由住民を訪はせられ、往昔明治天皇一視同仁の御聖徳を偲ばせ給ふ。

對 鷗 莊

位置 向の岡北端にあり、莊は元三條實美公の別邸で淺草橋場に在りたるものである。明治六年の頃

征韓論誼しき折 明治天皇親しく此莊に車駕を驅めさせられ三條公に御宸問賜りたる、誠に歴史的由緒ある建物である。所有者石井久太郎氏は連光會會長田中伯爵にこれを寄贈し、此地に移築し永久保存を圖る。昭和五年五月十一日 澄宮崇仁親王、朝香宮正彦王、東久邇宮盛厚王の三殿下は學習院生徒と共に聖蹟地御遠足の節此莊に御成、御書餐を召さる。

御 駒 櫻

位置 向の岡櫻の馬場に在り、明治天皇行幸にいつも此櫻樹に御愛馬をつながさしめ給うた。のち藤波言忠子が「みこまざくら」と命名した、光榮ある櫻樹である。天然記念物として 指定を受けて居る。

行幸橋と行在所趾富澤家

位置 多摩村大字連光寺乞田川の行幸橋（沖守固知事の命名）を渡り小さき坂をのぼり左側に在る、明治天皇屢の行幸に毎次御宸憩遊された最も光榮にみてる御宅である。慶長年間の建築にかゝり完全保存されてゐる。當主政賢氏は父君故政恕翁と共に御獵御案内役の重き任務を忠誠奉仕した。









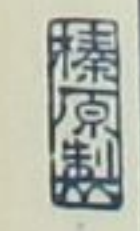


此が先に関係が有る田の卯友一流をとりて親善  
の關係が有つた。情しいことと五十三才で歿し  
た。三十三年忘るもふん多く人々忘るるもい  
しよの如く、昨死の念をふるもふん多く人の  
かまひり集まつた。胸懐を達達すること  
即生に決つた。

十一月七日

○鎌倉時代、慧心庵と云ふ美人庵が古板の行  
をもつた。此の如く、當つて余が素保と云ふ収めはこ  
とがあるが、偶々近刊の雜誌「集古」に竹治の  
考いれよふと、素保と書してあるから、左と  
収めとおく

○同考、地葉の材料と纏めて四五巻といふと思



このまゝ十年未の深のやうな葉採り、此種を  
を取出のて、此数日材料の目を此冊子に摘  
録してあるが、此の紙採のゆゑに、種々地葉  
の採りとして可なることとあつた。勿論これ  
は出版して余が四五の地葉採り、今と整  
裁を好まふこととあつた。強人と念頭するも  
かボツく出てくる。採字中、此種新報の  
社も、店井、一か訪ぬて来た。此の如く、採  
ると、廣井、一か訪ぬて来た。此の如く、採  
余の地葉採りを紙上に連載し、此のこととあつた。  
是れに應ずることとあつた。回顧すると十年  
程前、この新報紙上、余が地葉採りを数年





# 集古

昭和五年庚午十一月發行

## 美人が自ら面を焼き爛らした話

三 村 清 三 郎

私の師匠は、永阪或齋先生と云つた、菅野兼山の後で、漆畠の會輔堂を守つてゐた、本來永阪氏で、菅野氏に養はれ、名を伺、竹軒と號したが、維新後本姓に復し、永阪潜と云ひ、教部省に祿仕した、毎々己は講釋よりは落語が好きだといつてゐたなせといへば、啞の様で本統にある話と、本統の様な啞の違があるからなといはれはれはれた。丁度史談と創作といふ所かと思ふ。いくら事實の詮議をしたつて、本統の事が分る筈はない、本統らしくなるだけである、其の證據には、年が隔たつて段々分らなくなるべき筈の後世の史家の方が、いつも前代の史家の誤を正してゐる。嘘でも本統でも、我等の生活にひたりとこないものは何んにもならないから、學す。日本洞上聯燈録卷四、最乗了庵慧明禪師の法嗣の中に、慧春尼の傳がある。了庵といふのは、名高い小田原の道了様のお師匠で、あの大雄山最乗寺の開山である。慧春尼は、實は了庵禪師の肉妹で、姿色絶人とある、美人であつたらしい、年三十を過ぎて、兄の禪師に就いて得度をしやうとすると、兄さんの了庵禪師が許さぬ、二十後家は立て易いが三十後家は立てにくいと言ふ、女盛をむさむさ尼にして、なれさうも無く見えた。兄が許さぬのでしほしほとして去つたかと思ふと、就火爐、燒鉄箸、烙面上縦横、とある、美しかつた顔を、滅茶滅茶に烙いて、再び得度を求めた。此

の位の勇猛な求道心があつたので、果徹法源とある。其の頃鎌倉の瑞鹿山圓覺寺は、寺門繁昌し、大力量の坊さんが雲集してゐた。最乗寺から法務で使僧のたつことがあつたが、誰も憚つて行くものが無い、そこを慧春尼が、尼應奉命使乎と、此の大役を買つて出た、鹿山の龍象も尼の名を聞知つてゐるので、腕を扼して待つてゐた。慧春尼が杉木立深い圓覺寺の石段を徐かに一足づゝ拾つて行くと、突然一人の坊さんが尼の行手に立ちはだかり、尼がふいと見上ると、其の坊さんは裳をぐつとまくつて見せた、怒陰逆立、曰、老僧物三尺、慧春さんどうするかと見れば、閃電、擊石火、靜かに、樞袈開牝戸、曰、尼物無底、一衆嚙齷齪とある、やがて堂に上り、坐定つて後、侍者が茶を點じてきた、慧春さん其のお茶をすうつと堂頭の前へ持つて行き、此是和尙常用底茶蓋、請和尙喫、此の使者は見事にとまつた、燒火箸のあとにはあつても、さすがに猶有容色動人、捨てがたい美しさがあつたので大衆の中で思をかける坊さんが出来た、思ひあまつて、心のたけを打あけると、慧春さんにこりとして、お前が眞實に妾を思つて下さんなら嬉しいけれど、いざとなるとどうかしらと首をかしげれば、其坊さんそくぞくとして、いやもうどうしてどうして、たとへ火の中水の中でもとの誓言、そんなら妾が合圖をしたら、きつとですよと、堅い約束をした、所で、一日了庵禪師上堂說法、御堂一杯に大衆が詰めかけてゐた、禪師の口からいつ眞理が飛び出すか分らぬから、耳引きたて、一句一語も聞洩らすまいと、皆々緊張して聴聞してゐる眞ツたゞ中へ、慧春尼が寸糸もかけぬ丸裸で出てきて、さお前さんこゝでねませうよと、例の坊さんを呼び掛けた。戰場往來の勇士でも衿元へ落ちた芋蓋に狼狽する、火の中水の中は恐れないつもり坊さん、一たまりもなく逃げ出してしまつた。此の慧春尼は後に火定三昧に入つて滅度した。其時了庵禪師が、あついかと尋ねたら、猛火裏から生法師が何知つてと言つたとか、其火定石は今もあると聞いてゐる。時代を申せば了庵禪師が應永に亡くなつてゐるから南北朝の末であらう。







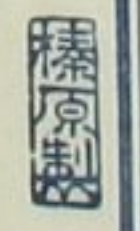
新書社に於ては毎冊掲載の版と利用して是而  
印刷し五百部位の冊子を成すと云ふ約束は  
ある。

十一月八日記

○山陽の詩編を流しと鑑定を求むるものあり  
居いて兄人の著書もその書目と其の破似す  
山陽のころしと一の也詩と此の木詩好者の  
集りたる是のゆゑも又し古に於て

漢詩考を考ふる而して得る書目を  
保つて此の無別語を以て横河の書

○天橋主の二字難別するも  
るし其の當我耐軒也保つ耐軒詩考  
を記らん其漢紀に此の稱ありと記す天



橋の二字印つて好むるを其の地名を雅と  
ちんとししめぬ文字を記さば其の意也

口掬田半古の漢詩に書し其の十二枚を  
持ち来るものあり漢詩の著者故大に其意を  
し余も古に交りて其女温藉して其若る  
あり書し其人の如し不幸なりして早く死し

其書世に重んぜらるが余も古の著者ありて  
あ、此書も書つて百十日入札の時後札  
し其書の事し其のれる所ありて今三  
十日と云ふの価値あり其書も其の也便に  
書の所在に據りて其書の事し其の也便に

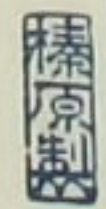


○昨の教養中一二の回を痛む得ル

折焚柴の記

字本 三冊

新井白石の此書の教と殊としくもろいが  
此字本の伴信友の自字本む下宮より  
自から授正し、自から物本し標題も自  
から書き伴氏の存書印も捺しある  
巻尾に言し事ハ近年月と後款也  
ある。伴の時代より此書ハ未だ刊行さ  
ぬが、存家ハ漏書を以て購書せし  
め、伴氏の精力ハ自から購書せし  
もの比、式ハ白石に傾倒し、此心志難



ハ六親ハある。自ハ此書より存家の手  
行字本を為集するに力めつゝある  
折柄此の字本を湯屋と好しく思  
ふ

書誘

一帖

此書ハ孫三定の心より家より流書の  
一帖あるが、巻末湖上流書の字も  
ある。但し孫の恠むむいさく、今も其  
湖独自の書風む書いれよむある、  
多分上版とんと版下に書いれよの  
〜いハ、刻版ス、其湖の此の書帖



かあるか、此うか、自合い、こんか、見れ、こと  
か、あ、い、恐、く、く、上、改、入、あ、ら、ま、り、つ、れ、の  
て、あ、ら、ま、り、

十一月十三日記

○大分市の校友、依、藤、藤、藤、と云ふか、山陽の詩、書、  
の、鑑、定、を、始、め、たい、と、云、ふ、と、訪、ね、て、来、れ、ど、ん、な、り、の  
か、と、後、親、し、て、見、ると、大、分、の、津、真、寺、の、山、陽、の、  
耶、馬、流、ら、ゆ、途、中、た、り、と、書、い、れ、詩、書、二、橋、由、  
一、の、び、あ、る、の、を、訪、ね、う、い、れ、自、合、の、隨、筆、山、陽、の、  
卷、首、に、載、せ、れ、こ、ん、と、同、い、い、ま、の、朝、吹、英、二、の、  
物、隔、で、自、合、か、隨、筆、を、始、行、す、る、時、物、に、朝、  
吹、の、子、息、(英、二、改、後、二、つ、き、)ら、と、平、山、堂、を、以、  
し、と、借、り、受、け、寄、る、と、い、に、撮、つ、て、即、日、返、却、せ、ら、る、

山陽

人、心、の、あ、る、。今、作、る、お、お、お、の、を、見、る、と、今、  
日、い、ち、あ、る、の、の、自、合、の、不、審、な、物、抱、い、れ、試、を、  
隨、筆、山、陽、を、云、出、し、と、寄、る、と、此、二、橋、を、較、べ、  
見、る、と、い、毫、毫、輕、友、の、物、也、か、あ、る、唯、此、異、な、る、一、點、  
ハ、朝、吹、の、画、の、山、陽、と、雪、毒、二、人、か、書、き、え、あ、る、  
點、の、三、人、か、画、を、見、し、て、あ、る、三、人、目、の、一、人、の、  
真、寺、の、物、也、あ、ら、ま、り、依、藤、の、二、人、の、隨、筆、  
の、字、と、こ、ん、と、似、て、似、似、し、と、あ、る、の、で、は、  
ん、ら、不、審、な、あ、る、の、を、折、の、帯、し、て、書、き、し、の、説、  
と、始、り、ん、と、上、京、し、れ、の、と、云、ふ、仍、て、其、情、の、来、歴、  
を、考、へ、し、し、と、い、海、真、寺、か、多、く、之、の、以、る、大、分、  
の、某、某、家、に、傳、入、し、れ、の、か、流、れ、て、行、々、面、倒、











ゆめの未麻心ありしころ、今寒葉蝶綴て  
関すまな左の如く記す

徳廟の時元文元年九月同乙集成冷回と云  
ふもの六る六十巻を齋来しけるに英吉  
御不之集のことありて監書局の評物下  
り清者なるに依るをいふ印せんとて真  
の集成を消すべきと命ありけるに  
和元年二月二六る版の真本をいふに  
せしころ、この時徳廟登殿の後  
しといと残り揚しきことあり、あれといし  
めの為をを其まに文容らん人の四体  
を換すべしと電驪日漏れと云ふこと



いといと有かぬさすまこと

○朽木の根元は然るをあるといふこと、植  
木の根元を套す事、ゆめの根元を生す  
事から、人も好んがまんと考ふことあり、是れ  
成すまじきことあり、余が師前の所改ある  
松の玄関先きの節りともあり、余の三の受す  
る所より、此頃まくの枝は枯木の葉を生し  
葉もを現し、ゆめ根根し、板木存を中  
人の枯木の原因を、高をいふもの、的の  
の事、判し難く、或は白懐のいふ、或はむら  
るもの所者らむとありと推測する、し  
か、試を根を掘つて見ると、熊毎の根あり







信の... 日記... 尋常... 大... 船... 文化... 古書... 史記... 漢書... 大村家... 韓非子...  
信の... 日記... 尋常... 大... 船... 文化... 古書... 史記... 漢書... 大村家... 韓非子...  
信の... 日記... 尋常... 大... 船... 文化... 古書... 史記... 漢書... 大村家... 韓非子...

漢書

類... 借出... 積... 市河米屋... 三... 史記... 漢書... 大村家... 韓非子...  
類... 借出... 積... 市河米屋... 三... 史記... 漢書... 大村家... 韓非子...  
類... 借出... 積... 市河米屋... 三... 史記... 漢書... 大村家... 韓非子...

〇杉田玄伯、銅版青像、玄伯自著の海歌



ある一掃と好く来りしよのあつ 神田春平の家  
う北の多くの及故とありし出でたるよのときふ  
自筆の海歌あるが好し!

たしめ

狩甲家のけんをわり

絵くす日よる免侍

思ひきや溪の志はくさ

おひしめ

かゝる日影に向ふべきこと

九幸丸人口

やめし狩甲家に湯を許せぬを古公  
と詠いしうそと表す(一) 歌の松るんとあ



故とんハ上集也



梅瀬日年一乃

十一月十八日



# 怪人と元鳶の押問答

降りろ、うんにや降りねえ

まさか天下の珍風景

川崎支局電話―百三十尺の煙突の上で寒氣と飢と戦ひながら十八日正午までに完全に五十七時間餘の耐命記録を作つた富士紡川崎工場煙突上の怪人物は十八日に至るも依然降りさうにもなくうららかな太陽を真黒な全身一杯に受けながら悠然と腰こらんで時々大聲でとなつてゐる。

川崎及び富士紡工場では怪人物の身の上に萬一のことがあつてはと降さんと協議したが何しろ百三十尺の煙突のことゝ誰しも登る者もなく困つてゐるがつひに争議員で元鳶職をやつたといふ佐藤賢次(三)君が決死隊となつて登ることになり同日午前九時十分降り飯四個、水四合、手袋一組、玉子二個、ブドウ酒五勺を持って登り怪人物に渡すと共に徒らに人を懸

がすのみだから一日降りて呉れと頼むと怪人物は降りたくなつたら勝手に降りる、争議員の要求を断するまでは断然降りぬ決心だ、餘計な世話をやくな今は手がかぢかんで降りられぬとなかく強硬、約三十分間押問答の末佐藤君は空しく寒さと恐ろしさにふるへて降りて来た。

この怪人物は合同労働組合藤沢支部の山田とのみで詳細不明だが臨はニグロのやうになり顔だけ白く光つてゐるが身体は相當に衰へてゐるらしく一人では到底降りられさうもないといはれてゐる。

この珍風景を見んものと横濱、東京方面から望遠鏡を持って見物に来る人で大騒ぎである。



# 食糧を擔ぎ上げて

## 煙突を降る勸告

男は横濱金屬勞働の山田と自稱

### 二百尺の上空で歡談

トして降り来たが  
「トしてよひ公費の  
御厚意を蒙ると稱  
子を三三袋り元氣に見えたり  
の光景を見物せんと工場の階は  
何しろ頭から足まで風暴でたれ  
だか判明する事が出来ないう  
擲は甚重を呈し佐藤氏が頂上に登  
つた時該廠本部の二階では風  
はと知らないが先方は私を上  
へと知つてました  
佐藤氏が降りるのを自らまじ煙  
突の上の百年は激戦の傍へゆき  
二五である

「頂上は ひとい風を二  
十斤ばかりだつたが寒くて誰へ  
さきでしたあの男の服装はコ  
ルゲンの労働服のやうでした  
何しろ頭から足まで風暴でたれ  
だか判明する事が出来ないう  
擲は甚重を呈し佐藤氏が頂上に登  
つた時該廠本部の二階では風  
はと知らないが先方は私を上  
へと知つてました  
佐藤氏が降りるのを自らまじ煙  
突の上の百年は激戦の傍へゆき  
二五である

「煙にむせながら  
眞黒な氣焰  
地上の記者と語る  
風邪を引いたが元氣だ」

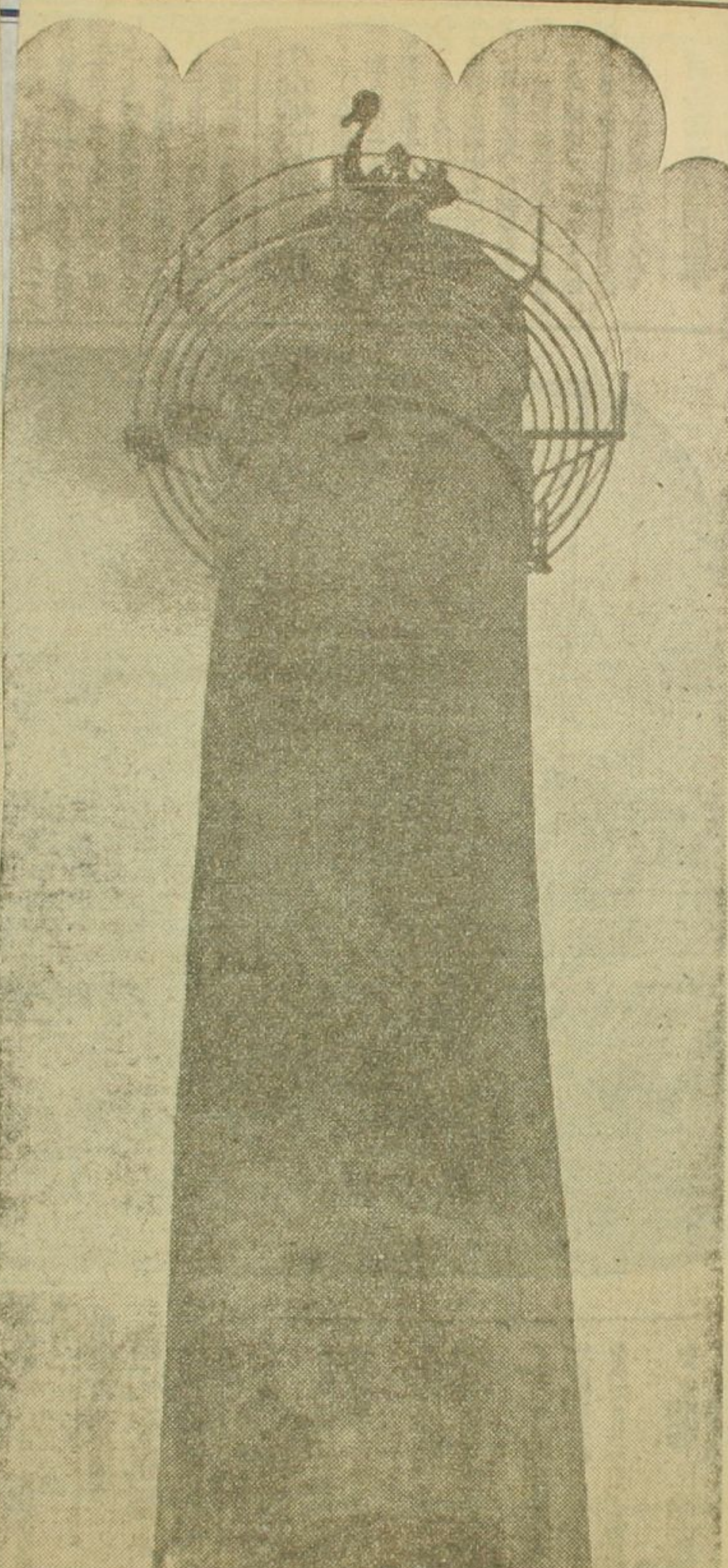
「風邪を引いたが元氣だ」  
地上の記者と語る  
風邪を引いたが元氣だ」

「萬一のこととすれば  
君は僕等と上つたのは日本  
二番目だといふこととすし  
いよくなすこととすし  
げなうな調子でも時間ちや  
日本だと真めをすとす  
りやまあねと鼻息をひす  
て「これも、鼻鳴しなさいや  
と死氣づくまだ降りないか  
かと思はれぬと、スミスと氣  
行つて見おけると、スミスと氣  
なるので、待つてゐるが戦でメ  
黒い煙を上げ  
時折「ク」と聲が出てくると  
ルズと膝を屈して  
「起す」と見下した氣を呈すと眞  
黒な煙を上げて

「薄氣味」の悪いことす  
る  
「薄氣味」の悪いことす  
る

「薄氣味」の悪いことす  
る  
「薄氣味」の悪いことす  
る

### 滞空三日目の煙突上の怪人——正午寫す



日九十月一十年五和昭 (二)









○寒嶽採塩記

美任のつら山伏うとあまの関とこあるとせ  
兼慶の杖をもて擲しといふこと謡也  
リ、こんの昔の王殿の敗し後、沙門曰言未  
ゆ子王軍を還し衣囊を提りめし自隨  
ひ行しと云ふ津吏こんを疑とわら、墨  
河し白奴子何ぞ未かん行かると、えを  
撞つぬす、こん由て免かると得ると云  
ぬを採ぬるしと暗合しや  
とあり、川田流江のいつむや書いれこの  
以じんとまふと旅中○関所も行こ曰し難儀  
のふと既驗しとありとあしき記しと云ふ



美任の採塩記にぬめりきりるが今もあつと  
忘却しや

○因書：又白石りるを云ふ

元祿の頃、俳諧者向のやりし新井白石と云  
甚甚名物ありと云ふ今もいふと云ふ(拙考と  
云ふ)一店の書白の待の名人と云ふと云ふ  
心とて附ゆる名(云)彼をハ桐陰と云ふ  
卯と云ふし向は、向て玉子とていふと云ふ  
花)又、白岩や朝霧清と馬の骨と云ふと得  
意の心るんば、形採り巧みと云ふと云ふ  
意味深からず、或時童子の出此谷(雲)谷  
木の音をもよよと思前冰を梅み云るる待文



とこそ工夫すべけんといひなと休けり後日果田  
才右門(悦義)御膳を勤むし白石や  
と悦義の御持才を勤むし御膳を勤む  
と登木入出谷と云ふよきことある  
いと云しか、果して此程能く電しとてお出果ん  
修りぬ、白石の柳葉のをい人かちと車も又た  
と見く、うん、悦義も白石の死後に使  
入道に露輪のけり、癖のうると云えりけん  
互に容てりしと見く

○徐三度、近代友邦の長刺の大家なる山尖  
近北人、刺しよふ、余大干の門人半干(吉田惠  
三郎)を早大田者、置きたる、関係も大干



も交り、半干、後大干、といふ人、傳へたる徐  
の刺印、数顆、余の手に移り、余之を珍重  
す、尚ほ世に大倉、西村、友邦、悦義、  
折徐、刺せり、印二三顆あり、然るも未  
だ徐の筆に傳る、墨跡を有せり、久保、長  
宗の脇幅を考へ、来り、よあ、是主、時  
村善、花と云ふ、這般、最刺家の名、我邦  
に伝へ得ること難し、即ち、贈り、有る、か  
けお、親し、其の、母、御、す、御、左、の、御、

山、水、清、音、 天地

翰墨地縁法古歌







才、但此更卒此の所の粗書、概以論之、位七利  
 家花二三幅、皆此類、その中に恒比とす、思ふ  
 折柄友人内、存案、概未過、其墨、山房一幅と  
 贈る。此物墨、氣淋漓、筆法、平画、推、似、毫  
 七、近、氣、ま、く、重、味、傑、心、の、一、と、見、る、を、得、心、し、秋  
 亦、無、紋、云、々、の、七、絶、を、送、す、其、筆、一、秋、山、房  
 也、全、山、院、書、畫、に、親、ま、か、り、望、に、揚、々、と、の、幅  
 往、々、二、三、々、月、揚、け、換、へ、た、る、と、あ、り、偶、に、此、物  
 物、の、題、を、得、て、漸、々、と、書、畫、望、問、の、風、色、に、  
 又、変、化、を、見、る。

十一月廿日記





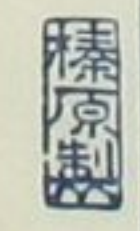
〇余、逸書(前掲抄板の)を載せり。文藝春秋に  
 及んば、利差大なり。の逸書がねの事ある。田：米  
 と後んとする事。外四の事お柱といふ事がある。逸書  
 と是れハマル事があると言ふ事ある。貞久の初耳  
 である。新書に *deceivable* と譯すべしかと附  
 記し。新書に文久の四年四月の月面の日  
 入れを、祖父が三面の表を命じしとあるが、當  
 二用ひしことあるいと云ふから、貞久の初耳である。  
 新書に其実利を在りし(る)保を囑わしおの自  
 分等の同窓自時代より力の一字を載しんじら  
 戸籍面に利差をらると云うておの改めを  
 新書に今カその名来の事あるが、實に推論



を二介しとある。新書に「阿香」と云つた。うてん語  
 の *Amor* 無名氏に云ふ。阿の阿果をハ春氣をば今  
 いたれと云ふてあるが、地空後編を以て依是の因  
 縁であるから、湘南を強と云ふことと云ふと云い  
 である。



○今頃京都に源氏谷村一太郎を訪ねて其の著  
集の古版回者も觀つた寺社も其の著集の  
間にも發行し流字版最も多し、高野寺  
北壇の寺内寺本圓寺延曆寺本能寺等  
皆多くある行の佛出あり左に收まり源氏を  
見し如くべし、北時分大寺、寺社、皆流字版  
字版を見行し流字版の一斑を見し、各寺  
社に印刷所ありたりと異なり是れとてんども  
流字版の著集の流字版に行はれりとも初めは合得  
を得ず、後継り後継り中、字方の徒に印摺せし  
めりことを知すあり、四傳集今異体同心  
鑑梓刊板と知すあり、其の末に徒抜出之



様多くと知すあり、北書を以て見るに今  
日の如く日印摺の業をこなすものあり、花寺  
これに印行を依頼し流字版の著集をこなすこと一歴  
り、版の面目ハ多少異なり所あり、慶永の  
特色はどの版にも有る、但比出色を究へつ  
ハ、漢版の史記より、大本を以て其の著集  
の著集、角倉の著集の著集、不の著集、  
冊の標題皆書林を異なり、流字版の著集、  
漢版の著集、此の著集、流字版の著集、  
揃り、流字版の著集、流字版の著集、



一 歙戒論 二冊

卷全：

於時唐永昌元年己亥中夏日

初進小比立結灌漑

惟昔元和之丁曆八月申旬於西京化聖  
聖常內寺宗存令摺刊之畢

一 福如類聚

於洛陽高其高寺

冬未之徒拔出之誤多

于時其七十八癸菊月庚辰

一 佛祖通載 二十二冊

本國寺學校

……

四傳集會異体同心鑄梓刊板流行  
天下

是去十七日癸卯月十九日

一 四教儀神注

延曆寺西谷完林坊秀室謹刊校



惟時長八年龍集癸黃鐘中浣

一 法蓮華經

于時長又去十六年十月日於延曆寺  
東塔東岳月為書三卷刊之畢

一 天台三大部補注 十四冊

寬永丙寅歲於洛陽本館粘合  
板行

一 止觀新記

寬永三曆丙寅九月日



於洛陽本館考内開之

一 史記 全部

大本 略冊標送之方

無議注

嵯峨史書流官本

一 景德傳燈錄

土山殿

十三卷の終りは左の部板有

延文戊戌重開

正儀一卷刊行

延文戊戌重開



正右一卷刊行

才十四の尾 字通連名の名を多く採り  
其の内：梵定四の字七あり

皇德依代紙刊考の字附著の名の内：楠正儀の  
名の見へてもおもしろし、尚ほ同寺別本に  
香爐形の印を捺す、前田家蔵の寶積經  
も同し印を捺しあり、足利直義の平泮本  
もこのことを知り得たり。尚ほ經名も又念せり  
二尺許の断簡に四家私印の印を五六顆  
目捺したるをえり、寛政皇后の所蔵たる  
ことをいへし、以上ハ皆稀觀の也也



尚ほあ村方の寫目せる圖書のあり

宋版 雲峰録 小本一冊

宋版 太平御覽 宋本 冊數未詳

此に五山牧元啟菴干と見え、云畫莊の内、如也  
目を悦ハしめたるもの、但妹の大字ありきり  
方慶寺の鐘銘と心りたり、清經の書ききり  
鷹の圖に題ありきり、稀に之を見り所也、画  
爪海北友松に似たり、他ハ有ぬ

の澤京中細川書院と見え、圖書と稱へし  
足利宮本澹然集一冊あり、一休孫の自寫  
本と稱へし、(宋)の位一難、但此一休の印と  
紫雲の寺の印あり、(副落)の宮と見え、二印共



西一休平河本等の疑無きことを云ふ所のよ、  
あるに流石に京都也。余の購ひ入るるよ、  
の歴代山元師の誰か身の上六冊官版宋  
本復利玉の命高き本三冊(森主之田花)並に  
法華玄義序一帖とす。此の法華玄義序  
ハ活字本の最古なるきよきものとす。其の考家の珠と  
為す不也。巻尾に

奉寄進 法華玄義序 百部

文禄四丁未 曆極月二十日  
大光山本回寺常住 願主一輪保  
とあり、用紙に雲母あり故を以てその考家疑と  
存するよあり、此の文禄以前に雲母を



林しる位巻の存するに疑なき、亦僧日保也  
法華系譜の四の廿名を収す、百部す、摺  
らざるほどもあり、この割合に多く、余に安  
田方、二部を収、谷村方より一部を収、日保未  
色標あり、同一書体の標題をあげり、官版と存  
殊り、さるも法華と本、稀也

○京都淨土中宇次、その書も愛見と云ふ入  
宇次、<sup>年</sup>一あり行を考ことあり、美樂寺も  
平等院七部を齋にじりんども、あのみその風  
景を特に見るにことあり、真聖寺も、宇次川  
●沼澤の書本の古利らんも、これす、これらも  
訪はず、世にきき、此らに先づ美樂山為福

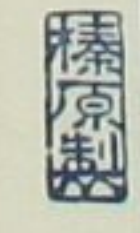






とて今の修儀中より是處をわけあり、先年  
二がまゝなりことあるの爰より記述を略す、  
此先年より一時的に河の中より十三重塔を地  
出し、明くとも其の建設をあらわさず、今の  
あり地味に建設せしむ、流石に形式雖重々  
七重にふかす

平等院を辭し、艇をて宇治川を横切、北河の勢御  
しく嵐山の大地河に比まん、頗る男性的な川の  
特色こゝにあり、吾等が北河を愛するもこゝに在  
り、兩岸の楓樹皆紅葉し、錦を織る、上流の山  
狭いまゝ不、遠くは望み難く殊に、前岸  
に巨岩絶壁状を為すものあり、散布す、一橋



ある新堂と云ふ、此橋上より川の風景を玩べ  
ば、萬葉集にも一處在り、と感せ、んや、古堂  
しく過きて、徒舟與石上寺を訪、寺の西に輕  
い傾斜の段路あり、左右に流石走り、樹竹樹は  
あまも、光はく、紅葉のトコ子んとて、こゝに如し、  
山門へ入ると、其の古堂に拾ふ寺僧、鐘を撞  
く、鐘聲の四境に響く、其の響を彼は快く可ら  
ず、本堂に近み、一拜の後、六段路を登り、川に海  
流、道に出せ、後、木島の起、段を味ひつ、終、  
前刻、海を、橋畔に、幸す、宇治の景、概括  
して云へ、嵐山に比まん、雄大なり、後、龍、男、性  
的、な、景、象、重、の、趣、あり、橋畔の一亭に、入り、茶を



燗の北家ニ豊公ニ茶を献じし際、釣瓶を新  
す、とて一説あり、時既ニ六時、道に  
ニ駕一三四十分を程と三茶の籠局に焼くる  
十一月廿四日也

○京都に遊ぶ毎に京都持参の割烹之を賞味す  
るの習慣、而も道中と有りてある。此が友人に  
誘ひて大佛の己にトヤ、又行き、吹雪の  
す、北家ニ常つて来りし、四十一年前、尾す、其  
後、家のあさくさく、とて、魚をせし、調理  
し、と出のさう、加、此が、いど、感懐、し、  
まて、茶合、席の、式、を、材料、極め、よ、と、例、と  
して、出の川魚、の、一、つ、も、出、さ、が、と、て、み、は、比、布、



（す）

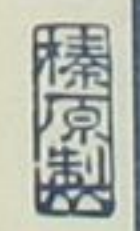
ソの期、ひ某の胡麻合、二粒の汁、ハ寸の  
鳥、唐墨、等、皆、大い、の、味、を、合、し、酒、も、亦、五  
樽、也、恐、く、京、都、固、有、の、料理、を、其、も、れ、す、と  
く、古、板、を、守、る、と、も、北、家、の、み、ま、し、ん、家、事  
の、此、き、り、既、に、崩、れ、か、つ、て、北、家、に、及、ひ、さ、る、ゆ、え、し、  
不、お、更、給、仕、の、婢、を、用、へ、お、女、主、膳、部、其、他  
を、室、の、入、口、ま、お、お、ら、来、り、客、の、為、ま、任、か、す、  
新、築、の、氣、を、別、天、地、に、在、る、か、如、く、思、ひ、さ、る、を、  
と、ご、す、亦、洋、京、中、の、一、快、也

北家の暖い昼白地、膳差天の二言を  
起す、汁、挽、る、桐、の、時、給、と、豊、公、用、印  
関白の焦印を決まぬりとす、



用内、概ハ往年端緒と判ひし、今ハ行状  
と電報と特記するの事を用ひたり、これら  
ハ時勢也

○村山秋海神田春平家と多くの手紙を  
引取り来りたる内、最干の及故あり、中ニ天海  
の書簡をあり、成應の年排ある田舎一枚、倭  
古印の印箋三十枚附あり、挿入の、徳古印  
ハ家花に少からず、印箋とぬりて挿入の、この  
多く重複する者一帖ニ貼れ、存本とす、天  
海の文書、廣く集りたり、如しと雖、尚ハ研定  
を要す、若し山業と名せしむ、景勝忠良  
の文書、一既ニ家花ニあるもの、とす、特記し、一



是ともきん、記さる也

○物業後一二の圖書を辨め

四季抄 守本 七冊

これ伊勢貞丈の著世に刊本あり、此言  
本ハ長澤付雄が仔細に誤らと正し、  
このもの、去海の序あり、いまだ刊  
本と比較するもの、目次の誤りあり、  
からずと云ふ、自筆と見え、このこと  
辨花の位あり

顔氏家訓 一冊

寛文版の通行本を名曲亭馬琴の



花を多し印記あり亦その書入校甚  
あり

閩閩私教圖 一卷

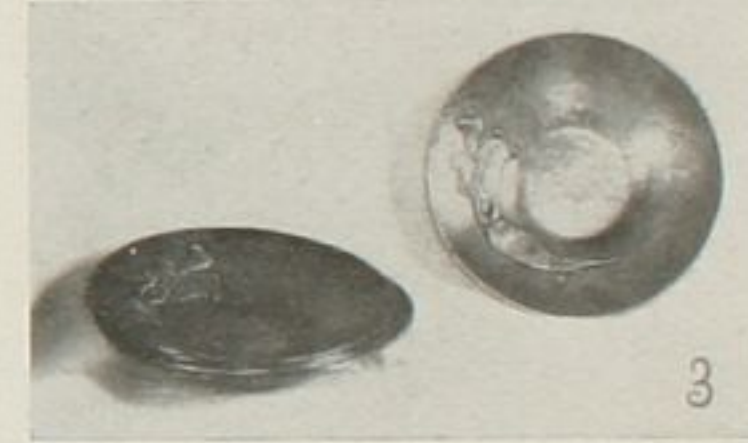
書名を缺く故に及びる名づく、支那  
画を田宗山回あり各圖に一語を題  
す、七と一、皇居古山寺の物を題  
卷首に印記あり、金比程のよき  
紙す殊く支那私教圖の杜る  
うみと記せんとす、いかに較り時代  
あり一概に排年す可らざるを  
十一月廿九日記



○去年工部家金田高原の生計を授け  
為め余も遠く若人とも北紀より作る  
紙布今も越し先づ余もペリハカツ  
を二種も百枚づつ世々一、英國米の  
沙袋と其のゴッテジを刻し、字を撰生せし  
め他の一、柄に大隈侯の像を彫らめ  
共に上出東より、沙袋の温涼候に  
えり、先侯の像あり、早大系に出  
部に於て有志に欲しんとす也、今  
向い志なく、市俵に入造し、今  
金界とあり、南の地味をよめ、  
将来希望の人あり



- 1 第十一回帝展入選作(竪尺百参ノ十  
喫煙具一組の例)
- 2 喫煙具一組の例
- 3 茶托五客の例
- 4 第十回帝展入選作(竪尺百参ノ十一  
價榜百五十円)
- 5 婦人帯締の例



銅印の例  
(立體と印面)



殖産模式置物  
羊の例



目録の複製を念ふに配らざる事本、枯木花咲せ親仁  
 への人七切将母の膝下に膝かさんたるお名法のおの  
 ととき流しうんも此書は古き心地けん、流しおの  
 のおも(あ)り、片々たる玩物もも、さう天証を後  
 めいありの具つ味も、殊々複製を念ふも中々者  
 るおも(あ)り、この種のもも複製を念ふも、おも(あ)り、  
 お名法の骨折を念ふも、おも(あ)り、おも(あ)り、おも(あ)り、  
 たのみ

複製の當事者から申しますと、赤本の複製は非常に  
 重い負擔です。原本開版の當時は、元來子供の玩具  
 ですから、粗末な版木に簡易に彫刻し無雑作に印刷  
 した粗製本であつたのですが、今日複製するに當つ  
 ては、先づ普通の線に彫り上げ、然る後小刀と木賊  
 を以て粗刻や磨滅の跡を模擬するのですから、彫工  
 の苦心は一通りでなく、一枚についての彫刻料は誹  
 諧名物鑑の三倍に當りました。彫刻は從來の通り大  
 塚祐次氏、印刷は阿部鍋五郎氏、

複製

は併記しあり。大和茶の事は『江戸真砂六十帖廣本』  
 第十二に、「江戸町々に水茶屋始る事」の條に「淺草  
 觀音芝神明其外宮地寺々には古來より有來る享保十  
 八丑年嵯峨釋迦如來回向院にて開帳兩國五十嵐向廣  
 小路に大和茶壺ぶく壹錢に賣る茶屋出來同朋町源七  
 と云者大坂者にて仕出す段々今は町々に出る」とあ  
 り。また笠森おせんおせんの事は、三田村鳶魚氏おせんの著『足  
 の向く儘』の中に縷述されたり。從來はおせんに仙  
 の字を當てをれるが、本書は千の字を以てせり。こ  
 もまた注意すべき事なり。新田大明神も寶曆の初め  
 より參詣群集せしよしなるが、明和七年半賀源内が  
 『神靈失口渡』の淨瑠璃を書きしより更に一層の流行  
 を來せりといふ。

尚ほ明和五年に發行せられし四文錢を「焼餅」と  
 いふ題にて落首に記せしが如きも無論再摺本の特色  
 な。附録の句集及び畫者等の事は次回に譲る。  
 枯木花咲せ親仁

(原本 岩崎文庫藏)  
 本書は曩に複製出版せし『桃太郎』、『猿蟹合戦』

と共に、日本五大昔噺の一として知られたる花咲爺  
 を取扱ひたるお定まりの五丁物の赤本なり。按ふに  
 該話の版本としては現存せるもの、内、最も古きも  
 のなるべし。出版書肆の江戸大傳馬町三丁目鱗形屋  
 なることは、第一丁の上欄外に、丸に三つ鱗の標識  
 を印刷せるにて知らる。開版年月は適確に知る能は  
 ずと雖も、畫風及び本書第四丁表に記されたる花卉  
 流行の年代等より推考すれば、寛延寶曆項の物なら  
 むと認め得らるゝ所あり。朝倉無聲氏編「新修日本  
 小説年表」赤本之部に、「枯木に花さかせ親仁 一  
 鳥居清滿畫作」とあるも、本書と同一のものなるべ  
 くや。清滿畫作の赤本は、他にも傳存せらるゝもの  
 あるより觀れば、それ或は然らんか。  
 草双紙の前驅と稱せらるゝ赤小本及び赤本の沿革  
 に就いては、既に本會第一期刊行の『名人ぞろへ』  
 及び『桃太郎』、第三期刊行の『初春のいわひ』、第四  
 期刊行の『猿蟹合戦』、第五期刊行の『猫鼠大友真鳥』  
 同じく『文福茶釜』等の解説に屢々評述されたれば、  
 こゝには重複を厭ひて省略することゝす。たゞ從來  
 の通説としては、行成表紙本より一轉して丹表紙と



目録の複製をめぐり、松木花咲七郎に  
おる松木のお

なれるもの即ち赤本なりといへれど、玩具としての赤本はます／＼多数の板行をせしより、その表紙の如きも漸次粗末のものとなり、寛永、正保以來専ら用ひられたる所謂丹表紙と稱するものと比較して、その色具合に一段の相違あるを見るなり。

題簽は、既刊『桃太郎』、『鼠花見』、『猿蟹合戦』等に見ると同じく、長方形の貼り外題なり。此種貼り外題は、表紙が爰に黒本となり、青本仕立となり、轉じて黄表紙となるにつれて、その形式に多少の變化を來たし、次第に正方形に近づきたり。而して表紙は更に全幅彩色摺の密畫を例とする草双紙仕立とまで發展せり。元來は兒童の玩具に過ぎざりし繪本、それが發達して、墨一遍摺の貼り外題それがまた進展して、遂には成人の間に愛好せらるゝに至りし跡を顧みれば、そこに一段の興趣を感ぜざるを得ざるなり。

さて本書の内容を見るに、我々が幼時父母の膝下にありて聽きし所とは、その筋立に多少の差なきにしもあらず。今その二三を擧げんに、貪慾の老婆は河上より流れ來りし飯櫃を拾ひ、正直の老婆はそれ

と同時に、ちんころ(狗兒)を捨ひ上げし云々の如き及び、隣の老爺が犬を殺せし跡へ植ゑし松を指して、正直の老爺に向ひ「いぬをころしたかわりに松の木をやるからこなたのすきにめされろ」といひ、またその松にて作りし白にて、餅を搗かずに殺類を引きたりといふが如き是れなり、又正直爺が大名の通行に際し、灰を携へて枯木に上り、「さてたゞ今咲せますはさくらきりしま百じこうさどんくはと御、にかけます」と一々諸木の名を述べ立つるが如きは、殊に著しき例なりとす。右のうち霧島つゞじは正保年中日向霧島山の所産を、薩州より大阪に出し、更に京師に持ち來り、富士山、鱗角と稱する二名種を大内に獻じ、後又明曆の初め、面向、無三、唐松の三品を江戸に下したりといふ。降つて正徳年間には江戸染井の植木屋伊兵衛といふ者、右の三品をはじめ異種を多く栽培したりといふ。つゞじの流行は『地錦抄』、『長生花林抄』等の類書にて知らる。百日紅の如きも元來は支那南方の植物なる由なれば、これ又珍木なりしならむ。本書にかゝる樹木を擧げたるは、所謂際物を當込みし當意即妙のわざく、れなる

べし。次に、詞章を按ずるに、既刊『桃太郎』には『むかし／＼』、『猿蟹合戦』には『むかし／＼あつたとき』などあるに反して、本書は『中むかしの事なるに』と冒頭し、その行文お伽草子に似たり。貪慾なるをけんどんと云へるも稍耳遠く聞ゆ。その花の咲きしを賞して、「いよ／＼親はないか」といへるは、古版の許判記に見ゆる野郎、遊女等の褒め詞を踏襲せるもの。當時の流行語なりしを知るべし。前出の霧島つゞじといひ、この褒詞といひ、當作者の作爲なるべく、古來の口傳的の形式を破壊せるもの、如くにも思はる。

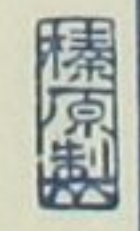
この點に關しては先年彗星會にて「赤本桃太郎」の輪講の催されしとき、本會同人林若樹氏の説かれし所大いに傾聽すべきものあり。今その大要を摘記せんに、始め老婆が拾ひ上げたる桃を老父に示せし時に、その桃の中より生れ出でしは桃太郎なりといふは從來の説話なるに、本書(亭保頃板藤田秀素畫)の「ぢぢばぢぢをふくしたちまちわかやきて一子をもうけも、太郎となづく」とあるは、頗る自然の理に合ひたるが如くにして却つて不自然の嫌ひあ

り。もと此話は兒童を主位と立て、語り傳へられしものなれば、突然桃から飛び出してこそ、無邪氣なるお伽話らしくあれ、理窟に墮しては興味を殺がむのみ。神代記の所謂何々より成りませるなどといふ所に、深遠の興趣を覺ゆるなり。云々といはれたる。按ふに右の論旨は移して以て本書の評に充つるを得べし。とはいへ現在我等の間に唱へらるゝ昔噺と元祿京保頃に行はれし此種の赤本と最も古き形式を備へたる傳説的昔噺とを對照するに當りては、その推移の跡を見べき資料として、本書の如きは頗る重要なものと謂ふべし。

最後に繪畫の上に就いて見るに、初頁の老婦の頭に帽子を頂ける、老爺が砲碌頭巾を冠り、砂金袋を脊にして、長煙管を持ちたる前の煙草盆の形狀等、一見浮世草子の挿繪にひとしく、前者は遊廓の遣手の容姿に、後者は買ひ手の大盡の風俗に比すべし。其他の器具調度等かゝる一小冊子を通じても、當時の事物を考覆するに足るは、古版繪本の重大なる賜物といはざるを得ず。本會が此書の複製を思ひ立ちし一因もまた茲にあり。



○京都府の往復好意の鬼を此の人集の  
特多の遊館といふ汽車に乗つた前日暮  
前日切符を買ふのが乗る難いので人集を  
てみる。朝の九時乗車を要する汽車が午後  
時京都に着く。京都を午後一時二十分  
と夜九時の二十分に東京に着く。八時  
かる。下る外、善悪の差なり。三時  
短縮するの便利の云ふも多し。自分  
して見る東海道を日中汽車に乗ることが  
いふも夜の七時迄に投するの不便  
か、といふ。往復日中乗れば、夜  
宋のいふが午後京都に着く。又日  
東



○切符の往復のことも便利である。東京と相  
やうな切符を京都に着くことも多し。晩  
の電車よりの切符を乗る。切符の  
九時。汽車の速力。各駅の停車時  
上から主として生きている。二三大駅  
まゝの走りつづける。車窓から物  
る。出来るといふ。車中。茶を  
念をいふ。入ること。出来の、飲  
いや。もういふ。鬼角大。世の中  
特。七時。車の一改善がある。  
○京都の電車。あり。六時。四時。次。激震を感  
し。だが、鬼角伊豆地方大震災の波  
及。と思ふ。



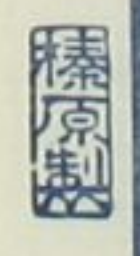
うろくに翌日午後の午後出立に歸んが初めは初めの  
節おび大勇を以つた。追々事態がどうなるかどう  
ある、事態の内容がどうなるかどうあるか、  
受け心あるいささかの震動は無いと云ふが、追々  
次第の教する所、格と、こんど地震の安全に  
全かす。先以事を付あし出うはれ三島から修  
福寺まで一帯の地が地盤を著しく、  
北の家の書物もねるの換装をさすはれと云ふ、且  
友のトシ子ルが山崩れ、  
言あしく二万五千人の死を生きし五千家と

藤原製

山崩れたと目撃見さんてある。北地帯の人々も  
甚中りある時、  
震が、往年の東京の震災の時より七級以上  
あると云はれてゐる。この地震の強さは、  
強いと云はれてゐる。この地震の強さは、  
かえつて不可抗力がある、  
この地震の強さは、  
んが、  
○世界各回珠、  
業の盛ん、  
刺からである、  
時供の火と回つた、



が元が正副を得るは為にあつたが、初後二利を  
も運むるを収縮することか出来ず、折角の  
のしに機械を進行せし上保護せぬが、  
大車等の後せんが、知るに、利ある上は  
機械の人力に代はるゝか、若くは、合現化する  
と云ふことか行はんと、生産の増大が、輸入を行は  
ざるゝか、のれから、夫れ、夫れ、替はれしと云ふを得  
るゝ、米廻るゝ、月、穀、年、結、の、物、は、内地の、下、原  
民に物を賣るゝ、物、は、米、生産の、七、八、け、方、も、之、類、  
する、仕、業、の、ある、。、実、に、合、現、化、るゝ、と、云、ふ、こ、と、も、  
一、と、云、ふ、ある、。、政、府、は、巴、比、佛、國、を、以、て、夫、業、  
の、類、の、もの、と、云、ふ、と、ある、。、夫、の、類、の、他、國、と、美



つて物を物物する、こととつとせ、大量米を  
とやら、ものから、生産の、従、業、者、の、其、情、と、安、ん、じ、  
ると、云、ふ、。、又、ウ、エ、ー、デ、ン、。、デ、ン、で、ル、ク、な、り、  
り、回、り、や、り、は、大、量、米、を、賣、るゝ、や、り、め、か、るゝ、夫、業、者、  
ハ、夫、れ、と、云、ふ、こと、は、日、本、を、以、て、一、概、に、亞、米、利、加、  
は、るゝ、と、云、ふ、こと、の、思、ひ、は、日、本、物、の、物、  
を、賣、るゝ、か、も、集、計、する、こ、と、も、夫、業、者、の、  
所、得、する、こ、と、も、夫、業、者、の、所、得、する、  
。、斯、波、志、三、郎、男、政、治、の、  
。、此、回、し、の、所、得、と、略、記、す、。



懸想文と云ふのは初めは書言ひの語をもちつ  
らんが其後改より録がぬらんか、此<sup>北</sup>極を  
一旦給くるとを更に開帳しとあり、文化文政頃  
の報條と云へしと云ふらん、其頃本物教の  
よきのなるらん、得て々知すべらん、こゝに  
ぬめおく、

○ふ者持と通る一巻<sup>北</sup>の法華書門を待た  
り、この巻首抱一筆の祝言立條あり、其  
り、全部抱一の書言すも亦も附書の跋文あり、  
り、文化十三年撰紙大津の永之の考とあり、  
此の大津の川紙の書家も抱一と云ふ親しき  
交りありし字書家也、斯る位のありし自



然の因縁より、書畫を二巻と目せ、白字振を  
うと法書と爲すをいへし、市佛瑞の二出のや  
よの余をなんの條に入る、誤記と云々

千禧文化十三年歲次丙子秋七月

大乘真字京洛等文院主抱一暉真  
和上鹽沐百拜謹言 □ 〇

...  
也極越大澤永支文華尙義志

○長澤休雄の校訂字本四季刊と稱し得る  
こと前二冊より世に流布す、刊本を得て比較  
せると、刊本の首巻の二頁文の序無く夏巻の

初出の夏巻のものを長澤本より首巻より置ききき  
併し序の終りも夏巻のものを削りて終るも  
ちりやう、中の文も増換あり、休雄が扱ひ  
たものあり、首巻も二項中代ら夏巻の一  
項の刊本と無き所あるが如き、其一例とす、刊  
本と比すれば、校訂本優ること疑ひなし、とて  
此の校訂本の休雄の序のいかに校する意を  
する事ともいふことあり、武野燭の奥附も  
既刊とあるが、出所とあること、休雄の  
あとも知らず、と云ふが如きものあり、その得る字  
本は、果して休雄の自筆本か否や、よく  
休雄の短冊二三枚と較べ、誤りなきこと未だ



断く重なる也。因に云ふ武旅他も又丈の量  
箱とは唯の校注を施しなすもの也。(十一月三十  
日記)

○京都の物づくりに、近列車ハ博覧の  
多し御を破ると京都の博覧に得れる業  
此のまゝ一たんふらるゝと翻後するも其業が  
神安政の尾基天鼓羅るる幸むの近軒  
の息子むあるのむを考ふる後因かまの計  
まゝのむの近軒ハ、表向くまゝの出るけ  
此西洋料理の衣むあるのむ  
流石に天鼓羅の本職かまの近軒を誇るゝ  
むあるから、公もこのまゝのむあるのむにおのが



から英つと通と存すことか出来ず、後んび又この  
く教へることをある。困難であるのハ衣の添きさ  
む飽くまかき廻のすしと、越えたる、まかきと困る、  
全体名が天鼓羅のむ、越の字が用ひとあるけ  
れども、越ハ禁物む、越の字の代りま、越の字を  
若むといふと、そのむある。衣ハ飽きむと、添きを要  
する、衣の綿入のむ揚方の杜を表白するも、  
全体何故ハ衣をかけるかと、まゝに、越其他の杜  
料の物味と、越かさい方め、まゝのむあるから、  
衣ハ、添くも、添め、まゝのむある。いふか、  
と下手ふか、ワシワシ、衣が、英、まゝのむある、  
を校か、まゝの骨か、め、ゆるるもの、ある、衣



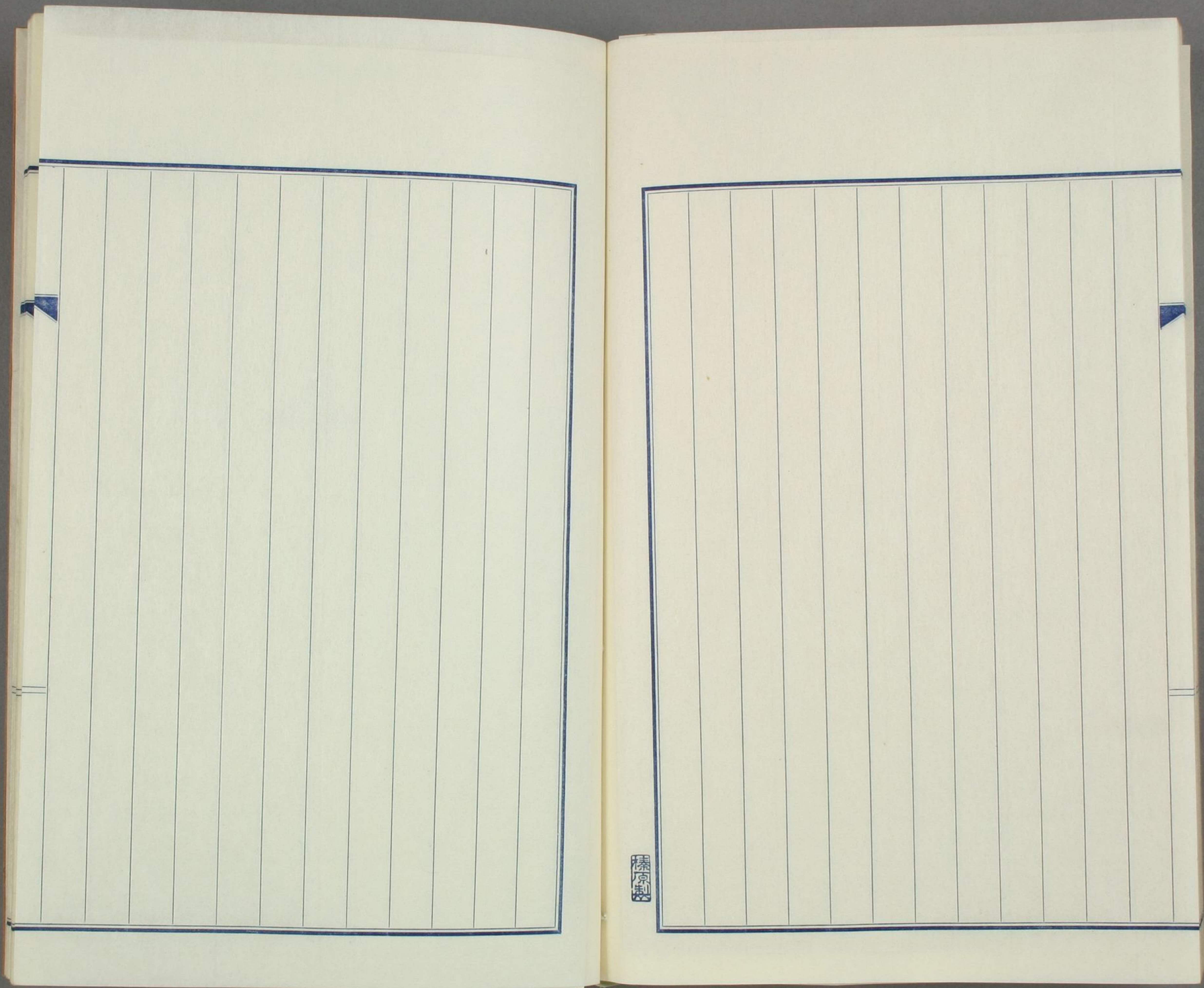




うきあつとてみる僧侶も折に揚の空業テンノウ  
をかふ、油断大敵のテンノウをのたふ大切なる  
侍語あると云ひ得るのみある。

深淵





東京製

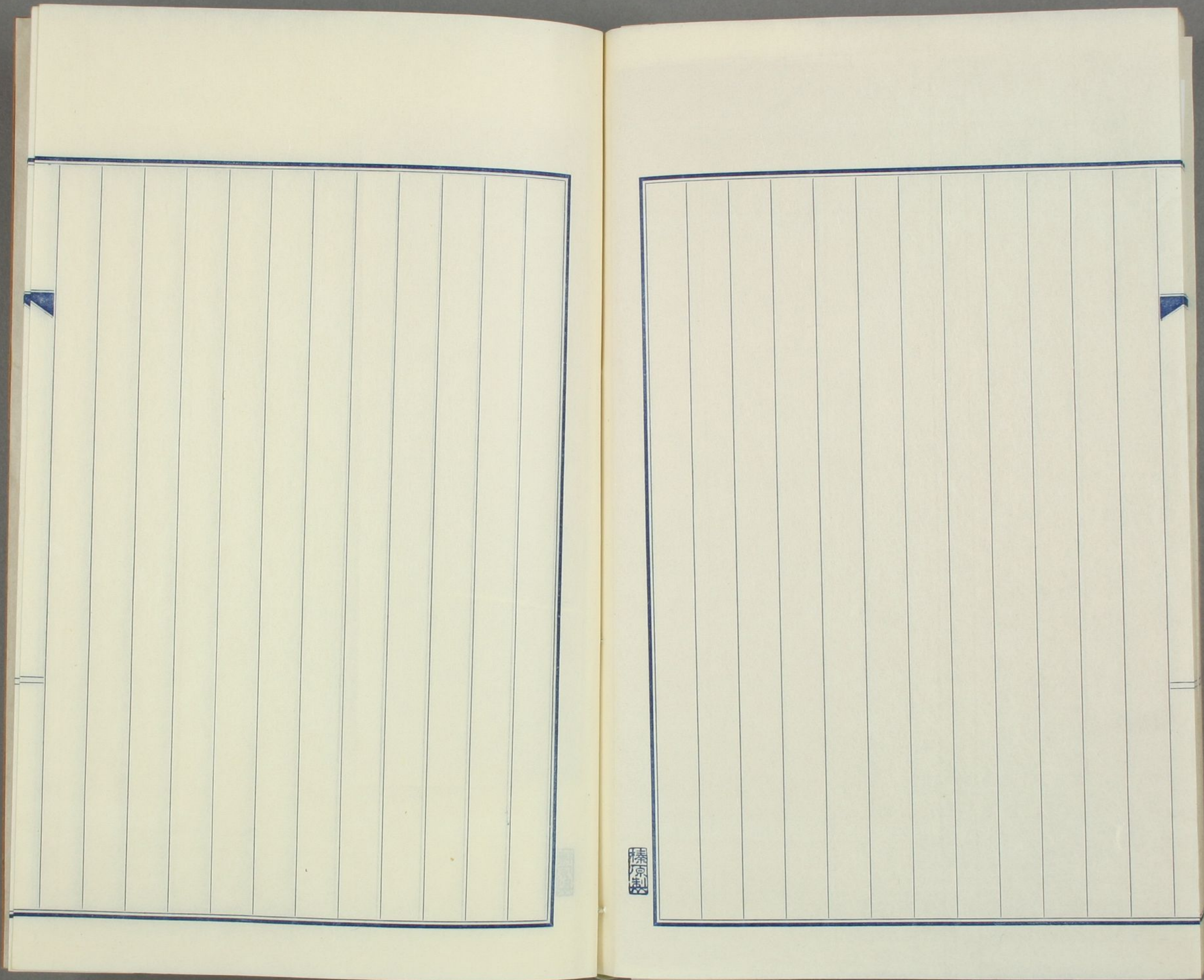


以下  
4 丁  
白紙









東京



以下全て  
白紙



